やがて世界が終わる、世界が生まれ変わる
――『大いなる帰滅の物語』第４章２節～４節読解 ――

岡　野　　潔

略号

MSK＝Mahāsaṃvartanīkathā（ed. K. Okano）

Loka-p＝Lokapaññatti（ed. E. Denis）

文献Ｘ＝『有為無為決択』第８章中に引用された書名不明の正量部作品

立世論＝立世阿毘曇論（大正 No. 1644）

やがて世界が終わる日が来る――梵文『大いなる帰滅の物語』（MSK）の中で最も興味を引く箇所は、第４章第２節の最後であろう。そこでは堕落した人類が遠からぬ未来、700年後に、滅びの時を迎えることが、ブーティカとブッダミトラという二人の正量部の高僧によって宣言される。続く第３節では、世の滅びが３種類のカタストロフ（小三災）としていかに現れるかが詳細に説かれる。次の第４節ではわずかに生き残った「人類の種子」たる人々がそれまでの生き方を反省して再出発し、やがて転輪王統治の時代に達して大きな繁栄を得、人間存在としての幸福を極めることが説かれる。しかしその最良の時代もまた終わる。人の生死のように、時代も死んでは生まれ変わることを運命づけられている。MSK の山場といってよいこの第４章第２～４節のヴィジョンは、インド小乗仏教諸部派の中で最も終末観が強く、「世界の終わりの日」に関心を抱く正量部が、阿含の転輪王経類から発展した中間劫（antarakalpa）の思想に基づいて、終末の世ならびに未来の世の有様についての考察を発達させた結果作り上げた独自のものである。劫末を扱う第３節は極めて暗く、次の未来劫を扱う第４節はとても明るく、明暗のコントラストが効果的である。特に世の終末の記述はインド仏教文献の中で最も詳しい小三災論を示す立世論（正量部）の小三災品とならんで、キリスト教の黙示録を思わせる性格のもので、漠然と

西方の預言者的な宗教の影響をのぞかせているといえる。

本論文は校訂本 OKANO（1998）に基づき、その箇所の和訳と研究を行なう。第一部において，梵文 MSK からの翻訳と，文献Ｘ（「蔵文」と記した）の翻訳を行う。次に第二部において、同じ正量部に属する宇宙論文献である立世論のパーリ語版である『ローカ・パンニャッティ』の相当箇所（I, 177.12-191.9）の翻訳を行う。なお本論文の執筆と同時に、印度学宗教学会『論集』34号（2007年12月）に掲載する論文を書く機会を得たので、本論文で扱うべき MSK 4.4.5-12（文献Ｘ §§ 175-181）の背後にある源泉資料の問題は、そちらでまとめて論じることにした。

第一部　MSK と文献Ｘの翻訳

第４章第２節　カリ［の時代］に入る

〔4.2.1〕 さて時代の濁り[1]に穢された者たち、以前に人々における［精神的］未熟性の故に尊敬された者たち[2]、動揺する［不安定な］見解をもつ者たちは、不正の道を人間たちに教えた。［人を間違った方向に導く］悪い道しるべのように。

〔蔵文§127〕 その後次第に、『五濁』（*pañcakaṣāya）によって堕落した人々が現われた。［すると］正しい人を希求する願望に合っている［が］、顛倒した見解によって高慢であるところの者が、［正しい］法ではない道を人々に教えた。

〔4.2.2〕 それ（不正の道）の結果である不幸に苦しめられ、食物を求めて、過
2 度に欲望をいだく人間たちは、農耕や牧畜などのきわめて穢い［仕事］に足を踏み入れた[3]。

〔蔵文§128〕 非法（*adharma）に従う結果として不幸に苦しめられ、生きるための食物を求めて、過度に欲望をいだくこれらの人々は、農耕・牧畜・

召使・商いなどに従事した。

〔4.2.3〕　食物は甚だ衰損を得た。危難の際に人間の心がそうなるように。百の労苦をもって［ようやく］得られた満足があったとしても、［それは］いかほどわずかな快の実現であったか。

〔蔵文§129〕　その後、食物全般が甚だ衰損を得た。大きな苦労をもってしても、わずかな快すらほとんど得ることが出来なかった。

〔4.2.4〕　胡麻と砂糖黍と牛乳が［人間の］労苦によって生じても、［それらが］精髄（つまり胡麻油・砂糖黍汁・ギー）を出すのはまた別の労苦によってであった[4)]。［作者の感想：］なぜならもし甚だ多くのことが、苛酷な状況のゆえになされるなら、少しの収穫はもたらされるものだ。

〔蔵文§130〕［人間の］大いなる労苦によって作られた胡麻や砂糖黍などと、雌牛や雌水牛など［の乳］は、［また人間の］大いなる労苦によって汁（*rasa 精髄つまり胡麻油・砂糖黍汁・ギー）を出した。大いなる労苦によって作られた穀物なども、堅さなどの欠点をもって現われた。

〔4.2.5〕　劣悪な食事をもつにいたり、彼ら人間はさらに寿命などに関して衰損を得た。［作者の感想：］最も卑しい行動様式に従うかぎり、誰がこの世で退落（幸いの喪失）でなく、繁栄（幸いの増大）に至ることがあろうか[5)]。

〔蔵文§131〕　その後、人々が劣悪な食べ物に親近したために、寿命などが大いに衰損したかたちで現われた。

〔4.2.6〕　大地はまもなく［昔からの］あり方を捨て、あちらこちら（至る所）都城や町によって飾られた[6)]。それはまるで、摘まれて［あちらこちら］蓮華がまばらに散在する天界の池［の姿］を、自ら示したかのようだった。

〔蔵文§132〕　その後、あらゆる地方において甚だ広範囲に（至る所）、村々や町々や都市などが人々の住居によって飾られた[7)]。

〔蔵文§133〕　こうしていくつもの時代が移り変わった時に、クラクッチャンダ（’khor ba ’jig）という仏・世尊が［世に］出現された。そしてその方が般涅槃された後、とても長い時が経って、コーナーガムニ（gser thub）如来が出現された。そしてその方が般涅槃された後、とても長い時が経って、カーシャパ（’od srungs）という大聖者が出現された[8)]。

〔4.2.7〕［釈迦族の］最高の王族の出である聖者、世尊がこの世界に生まれた。湖沼に［現われた］輝かしい一つの蓮のように、最も花開いた方（最も目覚めた方）、美しい方であった。

〔蔵文§134〕　その方（カーシャパ仏）が般涅槃された後、とても長い時が経って、カリ・ユガという最後の時代（*paścima-kāla）に[9)]、釈迦牟尼というわれらの師・如来が世に出現された[10)]。

〔4.2.8〕　卓絶した福徳から成る、かの［聖者］に出会った時、人々の悪い行動様式は、立ち去った。［作者の感想：］なぜなら太陽が昇る時、闇は人々を覆いつつ存在することができないからだ。

〔蔵文§135〕　かの師・世尊・釈迦牟尼におかれては、人々の罪ある行動様式が大いに消え去った（立ち去った *parāyayau）[11)]。

4　〔4.2.9〕　まさにその後、かのお方は最低の世界期（ユガ）であるカリを転じて、クリタ［・ユガ］を作ろうとしたかのようであった。威神力を行使するかのお方は、困窮［の時代］においても、あれほどの・・・[12)] 栄光を置いた。

〔蔵文〕　対応文なし。

〔4.2.10〕［六］道における苦しみの火の原因を滅ぼす、解脱への正しい道を［かのお方は］開示された。その道によって、［多くの］気高い人々も、あらゆる苦しみの寂滅に至った。

〔蔵文§136〕　かの世尊もまた、生ける者たちの六道輪廻の[13] 苦を滅ぼす、解脱の道を明らかにされた。その［教えの］道は、無数の気高い人々に、あらゆる苦の寂滅という性質をもつ、解脱の都城を教示する［ものであった］。

〔4.2.11〕　人間たちに最高の行動規範をお教えになり、［その］行動規範を［後の世代に］伝えてゆく者たち［の組織］（僧伽）を設立なさって後、このお方は、まるで燈明から燈明への［火の］連続を設けた最初の燈明であるかのように、吹き消えた（nirvavau 涅槃に入られた）。

〔蔵文§137〕　最高にすばらしい、そのような［解脱に至る］道を、神々と人々に説かれた。如来という、かの［最初の］燈明は、正法の燈明の相続を設けてから、自ら吹き消えた。

〔4.2.12〕　夫の後を追って死ぬことを切望する妻のような、大地（女性名詞）における、善逝の後を追って死ぬことへの切望が［ようやく］捨離された時に、［涅槃後の］二箇月目に、権能ある［比丘］五百人が、善逝の教えを結集した[14]。

〔蔵文§138〕　如来の般涅槃から二箇月後、［すなわち］アーシャーダ（*Āṣāḍha）月の白分の十三日より、欲望を離れた五百人の比丘たちが、七葉樹（*sapta-parṇa）の洞窟で、仏の教えを結集した。

〔4.2.13〕［教えの伝承に］動揺をもたらすことが［未だ］ありえない、百年［という時］が終わった時に、権能ある［比丘］七百人によって聖仙の王（仏陀）の教えが地上で再び結集された。

〔蔵文§139〕　さらに、如来の般涅槃から百年経った時に、欲望を離れた七百人の比丘たちが教えを結集した。

〔4.2.14〕　すでに第四の百の年において、苦行者のサンガ（僧伽）が固有の部派ごとにある時、牟尼たるヴァートシーの息子（muni-Vātsīsuta）に教えが至って、［教えは］秋の月の如く清浄となった[15)]。

〔蔵文§140〕　さらに、如来の般涅槃の後、四百年において、苦行者のサンガ（僧伽）において、サンガが分裂した［あり様］になったため、［それぞれが］各自の部派（*nikāya）に住していた時に、ヴァーシー（gnas ma = *Vā[t]sī）［という女］の息子、パーラ（*pāra?）・ヴァートシープトラ（*Vātsīputra）によって、一部派が教えを結集した[16)]。それ以来、この部派から法を説く者は、ヴァートシープトラ［派］と呼ばれる。

〔4.2.15〕　そして［仏滅後］第七の百年に、［伝承の］動揺（calatā）という雌ライオンに荒廃させられた時、聖サンミタ（ārya-Saṃmita）は仏教徒たちの最高の地位を担った。パドマ（紅蓮）がカマラ種の蓮たち（薄赤の蓮）の中で［最高の地位を担うが］如く[17)]。

〔蔵文§141〕　さらに、如来の涅槃後、七百年に、上座（*sthavira）である聖者（*muni）サンミタ（mang pos bkur ba = *Saṃmita）が、その（ヴァートシープトラ派の）部派の聖典伝承（阿含 *āgama）を結集した。それ以来、その部派を、サンミタの部派（*sāṃmitīya 正量部）と呼ぶ[18)]。

6　〔4.2.16〕　さらに［仏滅後］第八の百の年に、無垢の輝きをもつ、聖者ブーティとブッダミトラが（muni-Bhūti-Buddhamitrau）、あたかも月と太陽とがこの世界を輝かせるように、聖者の王（仏陀）の言葉を明らかにした[19)]。

〔蔵文§142〕　さらに再び、如来の涅槃後八百年に、上座であるブー

ティカ（bhu ti ka = *Bhūtika）とブッダミトラ（sangs rgyas bshes gnyen = *Buddhamitra）によって、かの（サンミタの）部派の諸々の聖典伝承（阿含）が結集された[20)]。

〔蔵文§143〕　これが正量部の教えの結集［の］五回と呼ばれる。

〔4.2.17〕　彼ら二人は語った：『［稲の］殻の出現をもち、［衰損に］悩まされつづけた、この劫は第９番目であった。それ（第９劫）にとって、［人の］肉体の劣化する七百年のみが今や残されている[21)]。

〔蔵文§144〕　ブーティカ（*Bhūtika）とブッダミトラ（*Buddhamitra）の彼ら二人によって説かれた：『［稲に］殻が出現して以来[22)]、これが、生成が終わった劫（*vivṛta-kalpa 住劫）［の］第９［の劫］である』と。

〔4.2.18〕　胡麻・砂糖黍・凝乳などにおいて、それぞれ胡麻油・砂糖黍汁・ギー（バターオイル）などの精髄（sāra）が現在ある。しかし、まもなく、カリ［・ユガ］の残りという、夜の魔によって精髄を吸われたそれらの形骸だけが残るだろう。』

〔蔵文§145〕［彼らの言葉の］主要な意味（要点）が語られるべきであるなら ―― 今現在に関していえば、胡麻・砂糖黍・凝乳などから、それぞれ［胡麻］油・［砂糖黍］汁・ギーなどの精髄（snying po rnams）が、とても僅かだが、生じる。

〔4.2.19〕［二人によって］若干述べられた、［現在の第９］劫の残っている時間のゆえでもあるが、電撃のような軽薄さ（calatā）の報いは、今日において過ぎ去っている[23)]。砂糖黍など［の食物］は、人間のわずかな福分（幸運）の結果として［未だ］完全には劣悪な性質には至っていない。 7

〔蔵文§146〕　胡麻［油］などは、生ける者たちのもつ福分（*bhāgya）のおかげで現在も出現していることが、知られるべきである。

第４章における、『カリ［の時代］に入る』という、第２節［おわる］。

第４章第３節　中間［劫］のカタストロフの出来事

〔4.3.1〕　飢饉・疾疫・刀兵という三つのカタストロフ（帰滅 saṃvarta）の火は[24]、将来の劫の終わり（劫末）に燃え上がるために[25]、今や煙を出し始めているかのようである。

〔蔵文§147〕　飢饉・疾疫・刀兵という三つのカタストロフ（帰滅）が、将来の劫の終わりに、火を生じる［ため］煙を出すかのように、今や見える。

〔4.3.2〕　慳貪・害心・怒りという最も適した燃料をもって[26]、この世界（人間たち）も、自己を苦しめ害するために、それら（飢饉・疾疫・刀兵の火）を燃えあがらせる。

〔蔵文§148〕　今現在でも、人間たちは自らを苦しめ害するために、慳貪・悪行（nyes spyod）・怒りなどの燃料により、それら［三種の］カタストロフの火を、いたるところで、燃え立たせようとする。

〔4.3.3〕　過度の大雨や無雨、局地的な雨、あるいは非時の雨が、随伴する天災（saheti）として、甚だしい飢饉を増大させる。あたかも毒樹［がはびこる］ように。

8

〔蔵文§149〕　今や、大雨や無雨、局地的に降る［雨］、あるいは非時の雨など、それらが、飢饉を増大させる。

【並行資料：L 75、世記経144b28】

〔4.3.4〕　なぜなら、この［第９中間劫の］カタストロフ（saṃvarta）はとりわけ飢饉によって生ずるだろう。ただし疾疫と刀兵が、まるで侍者であるかのように、それに同行する者となる[27)]。

【並行資料：L5】

〔蔵文§150〕　それから、飢饉によるカタストロフ（帰滅）が現われる。疾疫と刀兵によるカタストロフが、これに同行する侍者である。

〔4.3.5〕　飢饉をもつこの世界で、どこにおいても、食物などは甚だ入手が難しくなるだろう。［その時代に］幾人かの偉大な者にとっても、正しい法がどこにおいても［入手困難になる］であろう如く。

〔蔵文§151〕　飢饉をもつこの世界において、食物などは、甚だしく入手困難なものとなるだろう。

〔4.3.6〕　人間たちは掠奪し、あるいは殺して、生きる糧を手に入れるだろう。なぜなら非法の支配が生じるなら、相互の奪い合い（anyonya-vilopa）に帰着するものだからである。

〔蔵文§152〕　その時また、他人の財産を掠奪したり、人々を殺して［その］肉によって生きる糧を手に入れるだろう[28)]。

【並行資料：L76】

〔4.3.7〕　このように、国々・村々・家々も、食物を手に入れることができずに、まるで水の干上がった［池の］蓮のように、次第に滅びるだろう。

〔蔵文§153〕　国々・都市（*nagara）・市場町（*nigama）などに住む人々も、食物を入手することが困難になり、次第に滅びるだろう。

〔4.3.8〕 そして彼らの道理に適わない行状によって不機嫌になったかのような諸季節は、不規則な巡りをなし、食物を劣悪化させる[29)]。

〔蔵文§154〕 その後、道理に適わない行状をもつ人々の故に、六季節は見捨てて、［不規則なる］巡り（saṃcāra）によって、食物を劣悪化させる。

【並行資料：L9】

〔4.3.9〕 まるで突然襲いかかった（*upapātin）悪者によって（pāpeneva）取り憑かれた（苦しめられた）かのように、取り憑かれた（upaṣṛṣṭa）性質の食物によって、ピシャーチャ鬼をお供として、様々な疾病が現われるだろう[30)]。

〔蔵文§155〕 その後、悩害をもつ［人々の］罪悪が異熟を（*paripāka）得たため、様々な疾病が、ピシャーチャ鬼どもをお供に従えて、現われるだろう[31)]。

【並行資料：L10、世記経144c13-28】

〔4.3.10〕 様々な疾病とピシャーチャ鬼どもに襲われた彼らは、鎮撫のために、［犠牲獣の］殺生からなる祭祀によって供儀をなし、災禍を増大させるだろう。

〔蔵文§156〕 そして様々な疾病と様々なピシャーチャ鬼に襲われたその時、人々は疾病などを鎮撫するために、［犠牲獣の］殺生からなる供儀をなし、［ますます］災禍を増大させるだろう。

【並行資料：L11】

10 〔4.3.11〕 このように、ここで（地上で）疾病にかかった国々・村々・家々は次第に、冬の寒さに苦しめられた蓮のように、死滅するだろう。

〔蔵文§157〕 ここで（地上で）、国々・村々・都市などで、疾病は人々を死滅させるだろう。

【並行資料：L13、16、19、79、82、85】

〔4.3.12〕　そして、［自分のみ］享楽を得ようと欲し、互いに害しようとする［敵意の］心をいだく者たちの間に、大いなる刀兵［のカタストロフ］（mahāśastra）が起こるだろう。瞋恚の火の、焔の先端のごとく。

〔蔵文§158〕　この後、［自己の］享楽を求める人々［の］、互いに害しようとする［敵意の］心によって、大いなる刀兵［のカタストロフ］が起こるだろう。

〔4.3.13〕　東方・北方・西方・南方の王たちは、互いに［他を］うち滅ぼさんと、攻撃するだろう。［四方から吹く］風の如く。

〔蔵文§159〕　すなわち、東や北にいる［王たち］、西や南にいる王たちによって、互いに、［他を］うち滅ぼさんとする攻撃が起こるだろう。

【並行資料：L42】

〔4.3.14〕　相互になされた動乱（反乱）によって、［国々の］絶えざる没落と興起とを、王たちはもたらすだろう。海の波浪の如く。

〔蔵文§160〕　諸王は相互に動乱（反乱）をなして、絶えず繰り返し、勝利と敗北をなすだろう。

〔4.3.15〕　貪欲という燃料によって起こされた怒りの火をもつ、それらの［王たち］は、互いに互いを燃やしつつ、自らの家系の消滅をまねくだろう。　11

〔蔵文§161〕　貪欲の燃料によって起こされた怒りの火によって、諸王は互いに互いを燃やしつつ、自らの善福を[32] 完全に滅ぼし無くすだろう。

〔4.3.16〕 残りの国土と村々と家々は、この世界で互いに組みつきあったまま、怒りの火で焼かれて、滅びるだろう。[山火事における] 森の木々のように。

〔蔵文§162〕 残りの国々と、村々と、家々は、互いに滅ぼしあうだろう。

〔4.3.17〕 刀に似た切れ味をもつ、悪業によって生じた、草などをもちいて、[わずか] 二、三人であっても [出会うとたちまち] 互いに殺しあうだろう。[自らの人格の] 善い側面を [破壊しあう] 如く。

〔蔵文§163〕 悪業から生じる故に、草などに触ることによって [その草は] 刀となり、二・三人、あるいは五・六人であっても、互いに斬り合うだろう。

【並行資料：L51、転輪聖T1 41a28-29、転輪王523b2-3、世記経144b13-14】

〔4.3.18〕 三種のカタストロフ（小三災）の最後に導かれて来た人間たちは、十年の寿命をもち、容姿の美しさ・身の丈・力が減損した者として、七十年の間、在続するだろう[33)]。

〔蔵文§165〕 それから三種のカタストロフ（小三災）の直後に[34)]、あらゆる人間は、容姿・身の丈・横幅・力などが、減損するので、十年の寿命 [をもつ者として]、七十年の間、在続するだろう。

〔4.3.19〕 それらの甚だ苦しむ者たちにとって、七・七の年・月・日が、飢饉・疾病・刀兵 [のカタストロフ] をともなって、三つ（七・七・七の年・月・日の間）、二つ（七・七の月・日の間）、一つで（七の日の間）、過ぎるだろう[35)]。

〔蔵文§164〕 順次に七・七・七の年と月と日 [の期間を有するものが] 飢饉と疾病と刀兵との三種のカタストロフ（小三災）である。

〔4.3.20〕これらの、悪に没頭した人間たちは大抵、もっと劣る悪趣へ、この世

から［死後に］赴く。なぜなら、闇の中で［淵に］深く傾いた川堤の道をしばしば通いながら、特別な［注意深さの］苦労なくして、誰が下へ落ちないだろうか[36)]。

〔蔵文§166〕　これによって[37)]、悪に専ら没頭したとても多くの人間たちは、ひどく劣った悪趣に赴くだろう。

【並行資料：L12、15、18、44、48、78、世記経144b23-24、144c7-9】

〔4.3.21〕　このようにカタストロフの三つ組（小三災）が来た時、あたかも森林火事を得た木々の中における［或る一本の木の］如く、人間たちの中において、或る一人の人間が、或る所で、他の者たちから離れているという性質の故に(para-viyoga-guṇena)、［他の者たちに対して］慈しみの思いをもつ者となった。まるで［火事に焼けた木々の中で］一本の木が、最も樹液にあふれた［燃えにくい］ものであったかのように[38)]。

〔蔵文§167〕　三種のカタストロフ（小三災）がこの世界で過ぎてから（nye bar ’das nas)、人間たちの中で、或る者が、或る所で、他の者たちと離れている状態で見て、人々に慈しみの思いを生じるだろう[39)]。

【並行資料：転輪聖41a29-b3、転輪王523b5-7、世記経144b14-18】

〔4.3.22〕　［時代の］悪の進行の中で、少数ではあっても正しい道を捨てなかった生き残りの人間たちを、ヤクシャの王たちは見て、『これらの人々を断絶せしめるな』と思い、彼らを守護するだろう。

〔蔵文§168〕　大いなる罪悪の時代にも正しい道を捨てない或る者は（’ga’ zhig gis）また、［人類の］生き残りたちを見て、『人類の［種の］流れを断ち切ってはならない』と思い、彼らを守護するだろう[40)]。

【並行資料：L21、L53、L87】

〔4.3.23〕 同情の心が、彼ら（生き残った人間）のもとに生じる時、悪しき『劫の残り』（kalpāvaśeṣa）は、消え去るだろう。なぜなら［正しい］行為が失われている時に、悪人たちは［活動の］機会を得るものであるが、福徳の時運（星巡りの時）には、支配力をもつことはできない。

〔蔵文§169〕 その時、人々は慈しみから成る心を生じさせるので、『劫の終わり』（bskal pa'i mtha'）も［それ以上］広がることはないだろう。

【並行資料：L55】

第4章における、『中間［劫］のカタストロフ（帰滅、小三災）の出来事』という、第3節［おわる］。

第4章第4節 ［第10～20劫の］11から成る劫の歴史

〔4.4.1〕 その時、人間たちは互いに見合って、歓喜して友人の如く抱擁する。このように彼らのために［世を］保つ者として第10劫が、出現するだろう。

〔蔵文§170〕 その後、第10劫が始まる。
〔蔵文§171〕 その時、人々は友人の如く互いに見て、歓喜を有するだろう。それらの人々を支えるものとして第10劫が現われるだろう。

【並行資料：L22、56、89、転輪聖41b3-6、転輪王523b7-11】

〔4.4.2〕 生き残りの人間たちのように、遊星たちも正しい道を歩むだろう。諸季節は、聖者の弟子たちのように、悪の状態から離れるだろう。

14 〔蔵文§172〕 その時、もろもろの遊星（*graha）も正しい道を歩むだろう。諸季節も、悪の状態から離れたものとして、現われるだろう。

〔4.4.3〕 このように、内のあり方（ādhyātmikabhāva）と外のあり方（bāhya-bhāva）が、同じ性質をもつことに至る時、［正しい］法の支配と、安楽の何一

つ欠けることのない状態とが現われるだろう[41]。

〔蔵文§173〕　このように、内のあり方が［外のあり方と］自性において同じになった時、［正しい］法の支配が現われるだろう。また安楽も、何一つ欠けることのない状態へ至るだろう。

〔4.4.4〕［生き残りの］人間から生まれた別の人々、その者たちから生まれた人々、さらにその者たちから生まれた人々は、［それぞれ］２万歳の寿命、その倍の寿命（４万歳）、さらにその倍の寿命（８万歳）をもつことだろう。

〔蔵文§174〕　その後、人から人が生まれるだろう。その者たちから別の人々が、またその者たちからまた別の人々が［生まれるだろう］。その者たちからまた別の人々が［生まれる時］、段階的に、寿命が２万歳の人々が現われるだろう。これが『小なる［寿命］増進』である。その後段階的に、［寿命が］４万歳の人々が現われるだろう。これが『中なる［寿命］増進』である。さらに段階的に、寿命が８万歳の人々が現われる。これが『大なる［寿命］増進』である[42]。

【並行資料：L 26～31、57～66、93～99、転輪聖41c14-22、転輪王524b19-25】

〔4.4.5〕　頂点にいたった［寿命］増進をもつ人間たちにおいて、［各］家庭で強盛たらしめられた女神ラクシュミー（繁栄）のように、［美しく］成長した娘は、五百歳の時に嫁ぐに適するであろう[43]。

〔蔵文§175〕　ここで、［寿命］増進の頂点にいたった人間たちの家庭は、女神ラクシュミーの如く、じつに繁栄する。娘は五百歳で嫁ぐだろう[44]。

【並行資料：L 32、67、100、転輪聖41c23、転輪王524b27】

〔4.4.6〕　彼らは寿命［の長さ］と相応した、容貌（rūpa）その他の［性質の］卓越をもつだろう[45]。あらゆる方角に顔を向けた［万能の］福徳は、望まれた

ものであれば何であろうと、もたらさないことがあろうか。

〔蔵文§176〕 それらの人間たちには、寿命［の長さ］と相応して現われる、容貌（gzugs）その他［の性質］が、卓越したかたちで現われるだろう。

【並行資料：弥勒下生成佛経義浄訳T14 426b3、羅什訳423c18】

〔4.4.7〕 鶏鳴の［相互に聞こえるほど隣接する］場所に立つ村々によって、いたるところ［密集して］空隙なく、世界はよりいっそうの美しさを有するだろう[46)]。空が星々によって［美しく飾られる］如く。

〔蔵文§177〕 その時、鶏鳴の（khyim bya'i brjod pa'i）［相互に聞こえる］場（領域 yul）［となった］、人の住み処たる、大地すべては、村々や都市などによって充ち満ちたすがたで現われるだろう。

【並行資料：L34、転輪聖41c29、転輪王524b25-26】

〔4.4.8〕 純一なる清浄さに至るため、まるで人間たちのように、大地はすべての不浄（糞便）を、もろもろの悪（pāpāni）と同じように、下に捨てて（下へ処理して adhaḥ-kṛtvā）、合わさるだろう（sameṣyanti）[47)]。

〔蔵文§178〕 大地は不浄を下へと処理し（*adhaḥ-kṛtvā）、清浄さをもつ［土］が、現われるだろう。

【並行資料：弥勒下生成佛経義浄訳T14 426b6、羅什訳424a6】

〔4.4.9〕 ［『苦』に対抗する］『楽』の側が上に昇り、自分の側が下に沈む時、『苦』
16 は死滅するだろう。なぜなら［『苦』にとって『楽』という］敵の上昇（繁栄）は耐えがたいことであるから[48)]。

〔4.4.10〕 あらゆる幸福（sampad）に伴われた『楽』によって満足させられた人々は、［世界から］いなくなった『苦』について、思い出しもしないだろう。

〔蔵文§179〕　人々は、［あらゆる］『楽』を伴う完全な幸福によって満足して、『苦』を思い出さないだろう。

【並行資料：弥勒下生成佛経義浄訳T14 426b2、羅什訳423c18-19】

〔4.4.11〕　寒さ暑さ・飢え・老い・享受の欲求（bhoga-vāñchā）のみによって作られた労苦（klama）において、例外的に『苦』の名前を有するだけで、［人々は］ただ［『苦』について］便宜的な名称をもつにすぎなくなるだろう[49)]。

〔蔵文§180〕　寒さ暑さなど・飢え・老い・享受の欲求のみが［患いを］作り、『苦』があってもその場合は『苦』の便宜的名称（*vyavahāra）があるのみである。

【並行資料：Ｌ33、68、101、転輪聖41c23-25、転輪王524b28-29】

〔4.4.12〕　このように、最大の［寿命の］増進に達した者たちは、［８万年の寿量で］限りない年を過ごすだろう。なぜなら、［正しい］法に専心していることは、［寿命の］減退の機会を与えないから。

〔蔵文§181〕　その時、人々は『大なる［寿命］増進』に至って、幾千無量の年の間、繁栄するだろう。

【並行資料：Ｌ70、Ｌ104】

〔4.4.13〕　10、11［…と続く住劫の、残りの期間］に至って[50)]、ある時は再び［その寿命などを］失うだろう。なぜなら繁栄とは、長く続いたとしても、衰亡の終わりをもつものだからだ。

〔蔵文§182〕　再び、その後、『大なる［寿命］増進』から人々の寿命は落ちて衰えるだろう。

【並行資料：Ｌ71】

〔4.4.14〕［正しい］法より離れ落ちて、［人々は］寿命が10年であることに至るだろう。高い［境地］から堕落しつつある者たちのために、［彼らは］低劣なる下（地獄）への道を例示してやることになるだろう。
〔4.4.15〕 人間たちがこのような有り様になり、第10劫は［恐ろしい］状態に入るが、その［状態］とは、聞いて快いものではない、やめよう！［それとは］別のことだけが［今は］語られる。

〔蔵文§183〕 そして、人々は不法［の生き方］の故に、［正しい］法から離れ落ちて、再び以前のように、寿命が10年であることを得るだろう。その時また第10劫において、［正しい法に］背を向けることが現われるだろう。

〔4.4.16〕 この第10劫が［その］始めと終わりにおいて楽［の状態］と苦［の状態］をもつように、他の10の劫（第11～20劫）も後に［それぞれ］同様になるだろう。この世界において、未来のそれらの事（劫）は、心をもたないものであっても、原則として昔どおりの軌道（経過）をたどる。

〔蔵文§184〕 第10劫が、［その劫の］始めと終わりに、楽［の状態］と苦［の状態］をもつように、同様に、その後に更に現われるものである［合計］10の劫は、それぞれ［劫の］始めと終わりに、楽［の状態］と苦［の状態］をもつものとして、現われるだろう。

〔4.4.17〕 以上のように、この、生成し終わった［劫］（住劫）の世界は、太陽の出現以来、20劫の間存続する。あたかも［成劫の］創造の疲れをぬぐった後に、［住劫は、壊劫に予定される］最終的破壊を恐れるが故に、その［20劫の］
18 長さの期間にわたって、高く［世界をもちあげたまま］もちこたえるかの如く。

〔蔵文§185〕 こうして太陽の出現以来、20劫の間、生成し終わった［住劫の］世界は存続する、と［教えは］確立されている。

『［第10～20劫の］11から成る劫の歴史』という、第４節。『すでに生成が終わった状態（住劫期）の、楽と苦が［共にある］状態』という、第４章［おわる］。

第二部　並行資料の和訳

第一部で翻訳した文献と最も密接な関係にある文献、パーリ文『ローカ・パンニャッティ』（Lokapaññatti）の、内容的に相当する箇所の和訳を以下に挙げる。またその各文について、立世論の対応文も全文を挙げるべきであるが、ここでは〔対応：立世…〕というかたちで大正大蔵経第32巻の相当箇所の頁・段・行と、段落の初字を示すにとどめた。

Ｌ　犢子正量部[51] の聖典伝承『ローカ・パンニャッティ』（Lokapaññatti）中の小三災の出来事を説く部分（ed. E. Denis, I, 177.12-191.9）

Ｌ　『ローカ・パンニャッティ』　第11、小三災の章[52]

［１．小三災疾疫品］（第１劫の終わり～第２劫の初め）

Ｌ１　［p. 177, l. 12］［仏は説かれた：］１中間劫は１劫である（１中間劫をも１劫と名づける）［と］[53]。〔対応：立世 215b6-17佛～〕

Ｌ２　［仏は説かれた：］１劫（壊劫、20中間劫）の間、世界は帰滅する。１劫（成劫）の間、世界は生成する。１劫（滅劫）の間、世界は帰滅し終わった状態のまま持続する。１劫（住劫）の間、世界は生成し終わった状態のまま持続する［と］。〔対応：立世 215b17-19云～〕

Ｌ３　［仏は説かれた：］20中間劫（壊劫）の間、世界は帰滅する。20中間劫（成劫）の間、世界は生成する。20中間劫（滅劫）の間、世界は帰滅し終わった状態のまま持続する。20中間劫（住劫）の間、世界は生成し終わった状態のまま持続する［と］[54]。〔対応：立世 215b19-23世～〕

Ｌ４　［住劫はすでに］８劫が過ぎた。11劫が残されている。第９劫に、［現在の］劫が住する。細かくいえば、それ（第９劫）には700年が残されている[55]。〔対応：立世 215b23-27是～〕

Ｌ５　20の中間劫は大疾疫により、兵戈により、飢饉により［順々に展転して］帰滅すべきものである。そして［今の第９劫という］この中間劫は、飢饉によって、帰滅するだろう。［p. 178］〔対応：MSK 4.3.4; 立世 215b27-c1是～〕

Ｌ６　最初の中間劫（住劫の第１劫）が帰滅する、その時がくる[56)]。［その帰滅は］大疾疫、あらゆる病気によって現れる。［疾疫は］あらゆる国々に、大地すべてに、広がる。〔対応：立世 215c1-4第～〕

Ｌ７　その時代に、人間たちは短命で、10歳の寿命をもつ。〔対応：立世 215c4-8是～〕

Ｌ８　［人間たちは］非法の淫欲に染著し、不正な強欲に支配され、偽りの教え（邪法）にとらわれる[57)]。悪をなし、残酷なことをなし、罪をなし、善いことをなさず、善行をなさず、［危難に］怯える者たちを救護することをしない。さまざまな罪悪と不善の法（性質）をそなえ、身の悪行・口の悪行・意の悪行をやめようとしない。殺生・偸盗・邪淫・妄語・悪口・両舌・綺語・貪・瞋恚・邪見［の十不善業］をもつ。母と父を敬わず、沙門とバラモンを敬わず、一族の長老を敬わず[*58)]、様々な罪悪と不善の法（性質）をそなえる。それらの行い（業）は短命に導き、多病に導き、醜悪な容姿に導き、偉力なきことに導き、卑賤の部族（低い階級）に生まれることに導き、貧窮に導き、愚鈍な知性に導く。〔対応：立世 215c8-18是～〕

Ｌ９　このような行いをもつ者たちの、不正な行為のせいで、吹きつける風によって神々は正しい降雨を与えない。神々が正しい降雨を与えないので、その結果として『種子村・鬼神村』（植物）、薬草、『森の王』と、それらの種子が枯れる[59)]。それらの［植物は実を結んだとしてもその］色形の美が減じ、味が減じ、高さと周長が減じる。またそれらは滋養少なく、汁が少なく、・・・が少ない[60)]。人間たちはそれらの滋養が少ない食物を食べて、容貌の美が減じ、［肉体の］高さ・周長が減じる。〔対応：MSK 4.3.8; 立世 215c18-28由～〕

Ｌ10　彼らの体に様々な重い病気が生じる。瘡、癩病、『干涸び』（消耗性疾患）、癲癇、腫れ物、『血の胆汁』（黄疸）、『陰部の瘻管』（痔瘻か膀胱瘻）、［p. 179］糖尿病、咳と喘息、風邪、熱病、疥癬と皮癬、ラカサー癩、嘔吐下痢、その他の様々な病気が生じた。〔対応：MSK 4.3.9; 立世 215c28-216a3由～〕

Ｌ11　かの人間たちは、その大疾疫に襲われ、人間ならざる者たち（非人）に苦しめられて[61]、吉祥を願う精霊崇拝儀礼（ukha）と結びついた邪見にすがりつく。健康を願う者たちは、様々な生き物を殺しながら様々な犠牲祭を行う、「世尊は『健康は最高の利得である』と説かれた」と［考えて］[62]。それ（大疾疫）によって一昼夜の間に幾百の生類が死ぬ。幾千の生類が死ぬ。幾百千の生類が死ぬ。この災難は、中間劫に生まれた人間たちにとって自然に（dhātuso）生じる[63]。それはなぜか。［人々の］非法の行為のゆえ、不正な行為のゆえ、不善なる行為のゆえ、その結果を得る。そしてその時代において、如法の行為、公正な行為、善なる行為は、容易に得られないものである。この中間劫に生まれた人間たちにとって、劫の帰滅は自然に起こる。〔対応：MSK 4.3.11; 立世 216a4-12是～〕

Ｌ12　その人間たちは、罪悪の業（非福業）を生じさせ、身体が破壊した後、死後に、悪いところ・苦しいところ・堕ち行くところ・地獄に生じる。大抵は、地獄・畜生・餓鬼界に［生じる］[64]。〔対応：MSK 4.3.20; 立世 216a12-14是～〕

Ｌ13　［諸王が支配する］国々が次第に消滅する時が来る。村と市場町が残るだけとなる。僅少の、残った［村と市場町］はあちらこちらで［散り散りに存し、それぞれ］一つの地域に［あるだけとなる］。〔対応：MSK 4.3.11; 立世 216a14-16是～〕

Ｌ14　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. Ｌ8）。そのような［悪い］行いをもつ者たちには、病気に罹っているのに薬を与える者は無く、食物と飲物を［与える者も無い］。このように、［寿命に］定められたものではない死（横死）によって［幾百の生類が］死ぬ。幾千の生類が死ぬ。幾百千の生類が死ぬ。この災難は、中間劫に生まれた人間たちにとって自然に［生じる］。それはなぜか。［人々の］非法の行為のゆえ、不正な行為のゆえ、不善なる行為のゆえ、その結果を得る。そしてその時代において、如法の行為、公正な行為、善なる行為は、容易に得られないものである。この中間劫に生まれた人間たちにとって、劫の帰滅は自然に起こる。〔対応：立世 216a16-b3爾～〕

Ｌ15　その人間たちは、罪悪の行為に依って、多くの罪悪の業を生じさせ、身体が破壊した後、死後に、［p. 180］悪いところ・苦しいところ・堕ち行くところ・地獄に生じる。大抵は、地獄・畜生・餓鬼界に［生じる］。〔対応：MSK 4.3.20;

立世 216b3-4是～〕

L16　［国が消滅して後に残った］村と市場町が次第に消滅する時が来る。家々が残される。僅少の、残った［家々］はあちらこちらで［散り散りに存し、それぞれ］一つの地域に［あるだけとなる］。〔対応：MSK 4.3.11; 立世 216b4-6小～〕

L17　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. L8）。そのような［悪い］行いをもつ者たちは死ぬ。［それらの死骸を］運ぶ者もなく、焼く者もいない。このようにして、大地は至るところ骨鎖によって覆われる。一昼夜の間に幾千の生類が死ぬ。幾百千の生類が死ぬ。この災難は、中間劫に生まれた人間たちにとって自然に生じる。それはなぜか。［人々の］非法の行為のゆえ、不正な行為のゆえ、不善なる行為のゆえ、その結果を得る。そしてその時代において、如法の行為、公正な行為、善なる行為は、容易に得られないものである。この中間劫に生まれた人間たちにとって、劫の帰滅は自然に起こる。〔対応：立世 216b6-10爾～〕

L18　その人間たちは、罪悪の行為（非福業）に依って、多くの罪悪を生じさせ、身体が破壊した後、死後に、悪いところ・苦しいところ・堕ち行くところ・地獄に生じる。大抵は、地獄・畜生・餓鬼界に［生じる］。〔対応：MSK 4.3.20〕

L19　［国・村・市場町が消滅して後に残った］家々が次第に消滅する時が来る。このようにして人間たちは散り散りになり、あちらこちらで［生き残りが］一つの地域に［いる］。〔対応：MSK 4.3.11; 立世 216b10乃～〕

L20　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. L8）。そのような［悪い］行いをもつ者たちにとって、中間劫は残り七日を有する。その七日間に大半［の人］が死ぬ。〔対応：立世 216b10-12是～〕

L21　生き残りとなった、ある所のある者たちは、男であろうと女であろうと、如法に生きる人間であれば、［人類の］種子に等しいものとなる。それらの［人
22 間たち］を、人間ならざる者たち（非人）は[65] 守護し、警護し、保護下に置く。［彼らの毛穴から生命力を注ぐ。］[66]『これらの人々を断絶せしめるな』と。〔対応：MSK 4.3.22; 立世 216b12-16時～〕

L22　彼らは七日が過ぎた後に互いを見て、幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、抱擁して、過ごす。あたかも［今の人々が］長く異郷にいて留守であった

愛しい友を見て、幸福を感じ、［楽しみ、愛情を感じ、］抱擁して、過ごすように、まさに同じ様に、彼らは互いに相見て、幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、［p. 181］抱擁して、過ごす。そして彼らは彼らと同居する（男女として共寝をする）[67]。〔対応：MSK 4.4.1; 立世 216b17-27過～〕

Ｌ23　寿命が10年であるかの人間たちから実に、他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、より美しい容姿、より大きな神通力、より大きな威神力をもち、彼らの寿量は２万年である[68]。このすぐれた成果は、この中間劫に生まれた人間たちにとって、自然に起こる。それはなぜか。［人々の］如法の行為のゆえ、公正な行為のゆえ、善い行為のゆえ、その結果を得る。〔対応：MSK 4.4.4; 立世 216b27-c2是～〕

Ｌ24　その生ける者たちは、様々な善い行為（業）をそなえる[69]。身の善行・口の善行・意の善行をそなえ、身体が破壊した後、死後に、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）で死んで転生し、この世界に戻ってくる。この世界で彼らは生まれつき（自性）賢善なる者、生まれつき浄らかな者、生まれつき浄らかな種類の者であり、気高い品性をもち、高徳なる性質をもつ者である。彼らは殺生・偸盗・邪淫・不妄語・悪口・両舌・綺語を離れ、貪なく、瞋恚なく、正見をもつ。彼らは母と父を敬い、沙門とバラモンを敬い、一族の長老を敬い、様々な善い法（性質）をそなえる。〔対応：立世 216c2-9是～〕

Ｌ25　それらの行い（業）は長命に導き、少病に導き、美しい容姿に導き、高貴な部族（高い階級）に生まれることに導き、富財に導き、大偉力に導く。このような行いをもつ、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 216c9-13是～〕

Ｌ26　以上が、大疾疫による、この第１中間劫の終わりである[70]。［その終結は］別の［中間劫］へ導く。これ（２万歳）は［第２］中間劫の第１番目の『成立の頂』といわれる[71]。〔対応：立世 216c13-15如～〕

Ｌ27　更に、寿命が２万年であるかの人間たちから他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、・・すべて同じ（cf. Ｌ23）・・より大きな威神力をもち、彼らの寿量は４万年である。このすぐれた成果は、この中間劫に生まれた人間

たちにとって、自然に起こる。[p. 182] このような行いをもつ、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 216c15-217a1是～〕

L28　これ（4万歳）は［第2］中間劫の第2番目の『成立の頂』といわれる[72]。〔対応：立世 217a1-2如～〕

L29　更に、寿命が4万年であるかの人間たちから他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、すべて同じ（cf. L23）・・より大きな威神力をもち、彼らの寿量は8万年である[73]。このすぐれた恵みは、［この中間劫に生まれた人間たちにとって、自然に］起こる。・・すべて同じ（cf. L23～24）。〔対応：立世 217a2-14是～〕

L30　このような行いをもつ、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 217a14-16是～〕

L31　これ（8万歳）は［第2］中間劫の第3番目の『成立の頂』といわれる[74]。〔対応：MSK 4.4.4; 立世 217a16-19如～〕

L32　その時に人間たちは8万年の寿量をもつ。娘たちは五百歳で、嫁ぐに適する[75]。〔対応：MSK 4.4.5; 立世 217a19-21如～〕

L33　その時に人間たちは次のような患い（病）をもつ：大小便・寒さ暑さ・［性の］欲求・飢え・老い。〔対応：MSK 4.4.11; 立世 217a21-22是～〕

L34　その時に国々は富み栄える。村や市場町は鶏の飛べるほどの距離を隔てて互いに隣接する（kukkuṭa-sampātikā gāmanigamā）。〔対応：MSK 4.4.7; 立世 217a22-24如～〕

L35　わずかの耕作地に、あるいは樹に、多くの穀物［や果実］が生じる。その時に人間たちはわずかな［仕事の］努力の結果で生計を立てる。すべての者は、主に宿世の業果を享受する。彼らがもつそれらの多くの生活用品はすべて、良い性質で出来ている（簡単に壊れたりしない）。〔対応：立世 217a24-28耕～〕

L36　［また再び彼らに］十不善業道が現れない限り、究極（寿命の最高点）に達した状態の彼らには、［8万歳の］寿命による、不可数の［長い］時間が持

続する。[p. 183]〔対応：立世 217a28-29壽～〕

Ｌ37　十不善業道が現われる時、彼らの寿命は十年ずつ減少する。百年が経過すると、［寿命が］十年減少する。さらに百年が経過するたびに、［寿命が］十年減少する。［最後には］最高で十年という、わずかそれだけの寿命しか彼らはもたない時代がくる。〔対応：立世 217a29-b6從～〕

［２．小三災刀兵品］（第２劫の終わり～第３劫の初め）

Ｌ38　１中間劫は［１劫である］。・・先とすべて同じ（cf. Ｌ1～Ｌ3）。〔対応：立世 217b8-15佛～〕

Ｌ39　最初の中間劫（修正：第２中間劫）が帰滅する、その時がくる[76]。［その帰滅は］兵戈（戦争）によって、殺戮によって、暴力によって現れる。［兵戈は］あらゆる国々に、大地すべてに、広がる。人間ならざる者たち（非人）も人間たちを［疫病によって］悩害する。〔対応：立世 217b15-18第～〕

Ｌ40　その時代に、人間たちは短命であり、10歳の寿命をもつ。〔対応：立世 217b19-21是～〕

Ｌ41　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. Ｌ8）。そのような行いをもつそれらの人間たちにおいて、母は子と言い争い、子は母と、父は子と、子は父と、兄弟は姉妹と、姉妹は兄弟と、親友は親友と、従者は従者と［言い争う］。言い争いになった彼らは互いに殴打し、暴力を行う。〔対応：立世 217b22-c7是～〕

Ｌ42　はなはだ殺害を歓びとするそれらの人間たちにおいて、東方の王たちは西方の王たちを攻撃する。西方の王たちは東方の王たちと［戦い］、南方の王たちは北方の王たちと、北方の王たちは南方の王たちと［戦う］。〔対応：MSK 4.3.13; 立世 217c7-11是～〕

Ｌ43　闘いを好み、喧嘩を好み、諍いを好み、言い争いになって、杖をつかみ、刀をとり、怨憎をいだいて、彼らは互いに撃ちあい、切りあい、格闘しあい、不幸と災いを生じさせる。一昼夜の間に、幾百の生類が［相互の］殺し合いに入る。幾千の生類が殺し合いに入る。幾百千の生類が殺し合いに入る。この災難は、中間劫に生まれた人間たちにとって自然に生じる。それはなぜか。［人々

の］非法の行為のゆえ、不正な行為のゆえ、不善なる行為のゆえ、その結果を得る。そしてその時代において、如法の行為、公正な行為、善なる行為は、容易に得られないものである。こうして、中間劫に生まれた人間たちにとって、劫の破壊は自然に起こる。〔対応：立世 217c11-16行～〕

L44　その人間たちは、罪悪の行為に依って、多くの罪悪の業を生じさせ、身体が破壊した後、死後に、悪いところ・苦しいところ・堕ち行くところ・地獄に生じる。大抵は、地獄・畜生・餓鬼界に［生じる］。[p. 184]〔対応：MSK 4.3.20; 立世 217c16-19是～〕

L45　［国・村・市場町が消滅して］家々が次第に消滅する時がくる。国・村・市場町も同様である。［僅少の］家だけが生き残る[77]。僅少の、残った［家々］はあちらこちらで［散り散りに存し、それぞれが］一つの地域に［あるだけとなる］。〔対応：MSK 4.3.16; 立世 217c19-21是～〕

L46　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. L8）。そのような［悪い行い］をもつ者たちにおいて、東の家々が西の家々を攻撃する。西の家々が東の家々を攻撃する。南の家々が北の家々を攻撃する。北の家々が南の家々を攻撃する。〔対応：立世 217c21-218a3爾～〕

L47　闘いを好み、喧嘩を好み、諍いを好み、言い争いになって、杖をつかみ、刀をとり、怨憎をいだいて、彼らは互いに撃ちあい、切りあい、格闘しあって、不幸と災いを生じさせる。一昼夜の間に、幾百の生類が［相互の］殺し合いに入る。幾千の生類が殺し合いに入る。幾百千の生類が殺し合いに入る。この災難は、中間劫に生まれた人間たちにとって自然に（dhātuso）生じる。それはなぜか。［人々の］非法の行為のゆえ、不正な行為のゆえ、不善なる行為のゆえ、その結果を得る。そしてその時代において、如法の行為、公正な行為、善なる行為は、容易に得られないものである。中間劫に生まれた人間たちにとって、
26 劫の帰滅は自然に起こる。〔対応：立世 218a3-8行～〕

L48　その人間たちは、罪悪の行為に依って、多くの罪悪の業を生じさせ、身体が破壊した後、死後に、悪いところ・苦しいところ・堕ち行くところ・地獄に生じる。大抵は、地獄・畜生・餓鬼界に［生じる］。〔対応：MSK 4.3.20; 立世 218a8-11, 218a21-23是～〕

Ｌ49　［国・村・市場町が消滅した後］家々が次第に消滅する時が来る。このようにして、人間たちは散り散りになり、僅少の生き残った者たちはあちらこちらで一つの地域に［いる］。〔対応：立世 218a23-24是～〕

Ｌ50　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. Ｌ8）。〔対応：立世 218a24-26此～〕

Ｌ51　そのような［悪い行い］をもつ者たちにとって、その中間劫は残り七日を有するのみとなる[78]。その七日においては、草葉であれ木切れであれ、触ったところの物はすべて刀剣になる。彼らは互いに撃ちあい、切りあい、格闘しあって、不幸と災いを生じさせる。〔対応：MSK 4.3.17; 立世 218a26-28是～〕

Ｌ52　かの人間たちはあちらこちらで、兵戈・殺戮を恐れて、［p. 185］草やぶの中にすら入り込む。密林にすら、川の越えがたい所すら、山々の難所すら、入り込む。互いに出会うと、殺戮に怯えさせられた彼らは、とびあがって走り、ひたすら逃げ、ころがるように走り去る。まるで牛を屠殺する行為を目撃した時と同じように、互いに出会うと、殺戮に怯えさせられた彼らは、とびあがって走り、ひたすら逃げ、ころがるように走り去る。その七日間に、大部分の人が、殺し合いに入る。〔対応：立世 218a28-b3是～〕

Ｌ53　生き残りとなった、ある所のある者たちは、男であろうと女であろうと、如法に生きる人間であれば、［人類の］種子に等しいものとなる。それらの［人間たち］を、人間ならざる者たち（非人）は守護し、警護し、保護下に置く。［彼らの毛穴から生命力を注ぐ。］『これらの人々を断絶せしめるな』と。〔対応：MSK 4.3.22; 立世 215b4-8時～〕

Ｌ54　七日が過ぎると、兵戈・殺戮は終息する。人間ならざる者たちは立ち去り、雨が降る。［新しい］劫が出現する[79]。〔対応：立世 218b8-11過～〕

Ｌ55　［あらゆる］善法が確立する。幸福があり、無病があり、大きな同情心が彼らに起こる。大きな同情心が起これば、慈しみの心が起こる。慈しみの心が起これば、非暴力［のやさしい心］が起こる。〔対応：MSK 4.3.23; 立世 218b11-13一～〕

Ｌ56　非暴力［のやさしい心］が起こる時、彼らは互いを見て、幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、抱擁して、過ごす。あたかも［今の人々が］長く異郷に

いて留守であった愛しい友を見て、［幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、抱擁して、過ごすように、まさに同じ様に、彼らは互いを見て、］幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、抱擁して、過ごす。そして彼らは彼らと同居する（男女として共寝をする）。〔対応：MSK 4.4.1; 立世 218b14-18由～〕

L57　寿命が10年であるかの人間たちから実に、他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、より美しい容姿、より大きな能力、より大きな神通力、より大きな威神力をもち、彼らの寿量は２万年である。このすぐれた恵みは、この中間劫に生まれた人間たちにとって、自然に起こる。それはなぜか。［人々の］如法の行為のゆえ、公正な行為のゆえ、善い行為のゆえ、その結果を得る。〔対応：MSK 4.4.4; 立世 218b18-22是～〕

L58　その人間たちは、様々な善い行為（業）をそなえる。身の善行・口の善行・意の善行をそなえ、身体が破壊した後、死後に、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）で死んで転生し、この世界に戻ってくる。彼らは正法を行い、生まれつき（自性）賢善なる者、生まれつき浄らかな者、生まれつき浄らかな種類の者であり、気高い品性をもち、高徳なる性質をもつ者である。彼らは殺生・偸盗・邪淫・［p. 186］不妄語・悪口・両舌・綺語を離れ、貪なく、瞋恚なく、正見をもつ。彼らは母と父を敬い、沙門とバラモンを敬い、一族の長老を敬い、様々な善い法（性質）をそなえる。それらの行い（業）は長命に導き、少病に導き、美しい容姿に導き、大偉力に導き、高貴な部族（高い階級）に生まれることに導き、富財に導き、大功徳に導く。〔対応：立世 218b22-c2是～〕

L59　このような行いをもつ、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 218c2-4是～〕

L60　以上が、兵戈・殺戮・殺生による、この第２中間劫の終わりである。［その
28　の終結は］別の［中間劫］へ導く。これ（２万歳）は［第３］中間劫の第１番目の『成立の頂』といわれる[80)]。〔対応：立世 218c4-6如～〕

L61　更に、寿命が２万年であるかの人間たちから他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、・・すべて同じ（cf. L23）・・より大きな威神力をもち、彼らの寿量は４万年である。・・すべて同じ（cf. L23～L24）。〔対応：立世

218c6-19是～〕

Ｌ62　このような行いをもつ、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 218c19-21是～〕

Ｌ63　これ（４万歳）は［第３］中間劫の第２番目の『成立の頂』といわれる[81]。〔対応：立世 218c21-22如～〕

Ｌ64　更に、寿命が４万年であるかの人間たちから他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、・・すべて同じ（cf. Ｌ23）・・より大きな威神力をもち、彼らの寿量は８万年である[82]。〔対応：立世 218c22-25次～〕

Ｌ65　［このような行いをもつ］すべてのその人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 219a5-7是～〕

Ｌ66　これ（８万歳）は［第３］中間劫の第３番目の『成立の頂』といわれる。〔対応：MSK 4.4.4; 立世 219a7-10如～〕

Ｌ67　その時に人間たちは８万年の寿量をもつ。［p. 187］娘たちは五百歳で、嫁ぐに適する。〔対応：MSK 4.4.5; 立世 219a10-12如～〕

Ｌ68　その時に人間たちは次のような患い（病）をもつ：大小便・寒さ暑さ・［性の］欲求・飢え・老い。〔対応：MSK 4.4.11; 立世 219a12-13是～〕

Ｌ69　その時に国々は富み栄える。〔対応：立世 219a13-19如～〕

Ｌ70　［また再び彼らに］十不善業道が現れない限り、究極（寿命の最高点）に達した状態の彼らには、［８万歳の］寿命による、不可数の［久しい］時間が持続する。〔対応：MSK 4.4.12; 立世 219a19-20壽～〕

Ｌ71　十不善業道が現われる時、彼らの寿命は十年ずつ減少する。百年が経過すると、［寿命が］十年減少する。さらに百年が経過するたびに、［寿命が］十年減少する。［最後には］最高で十年という、わずかそれだけの寿命しか彼らはもたない時代がくる。〔対応：MSK 4.4.13; 立世 219a20-26從～〕

［３．小三災飢餓災品］（第３劫の終わり～第４劫の初め）

Ｌ72　１中間劫は［１劫である］。・・すべて同じ（cf. Ｌ1～Ｌ3）。〔対応：立世 219a28-b6佛～〕

Ｌ73　最初の中間劫（修正：第３中間劫）が帰滅する、その時がくる[83]。［その帰滅は］飢饉によって、生ける者たちにとっての旱魃、あらゆる穀物に対する無雨によって、現れる。［飢饉は］あらゆる国々に、大地すべてに、広がる。人間ならざる者たち（非人）も［疾疫によって］人間たちを悩害する。〔対応：立世 219b6-10第～〕

Ｌ74　その時代に、人間たちは短命であり、10歳の寿命をもつ。〔対応：立世 219b10-13是～〕

Ｌ75　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. Ｌ8）。そのような行いをもつそれらの人間たちに、天は二、三年間雨を降らさない。天が二、三年間雨を降らさないので、飢饉が、『くじ引き棒による生活』［という名称の飢饉］が、起こる[84]。〔対応：MSK 4.3.3; 立世 219b13-25是～〕

Ｌ76　力を有する者は肉の食事をもち、もっと力が弱い者たちから、力づくでそれをもぎ取って食べる。飢えに逼られ、彼らは［皆］飢えと渇きをもつ。〔対応：MSK 4.3.6; 立世 219b25-27是～〕

Ｌ77　一昼夜の間に幾百の生類が死ぬ。・・すべて同じ（cf. Ｌ11）。この災難は、中間劫に生まれた人間たちにとって自然に生じる。それはなぜか。［人々の］非法の行為のゆえ、不正な行為のゆえ、不善なる行為のゆえ、その結果を得る。［p. 188］そしてその時代において、如法の行為、公正な行為、善なる行為は、容易に得られないものである。この中間劫に生まれた人間たちにとって、劫の帰滅は自然に起こる。〔対応：立世 219b27-c2以～〕

Ｌ78　その人間たちは、罪悪の行為（非福業）に依って、多くの罪悪を生じさせ、身体が破壊した後、死後に、悪いところ・苦しいところ・堕ち行くところ・地獄に生じる。大抵は、地獄・畜生・餓鬼界に［生じる］。〔対応：MSK 4.3.20; 立世 219c2-5是～〕

Ｌ79　［諸王が支配する］国々が次第に消滅する時が来る。村と市場町が残るだけとなる。僅少の、残った［村と市場町］はあちらこちらで［散り散りに存し、

それぞれ］一つの地域に［あるだけとなる］。〔対応：MSK 4.3.11; 立世 219c5-7時～〕

Ｌ80　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. Ｌ8）。そのような［悪い］行いをもつ者たちに天は四、五年間雨を降らさない。天が四、五年間雨を降らさないので、生野菜は入手が難しくなる。まして米穀は言うまでもない。生ける者たちは食への渇望をもち、飢えを本性とする。カラス・ワシ・タカ・ジャッカル［など食するに適しない禽獣］を殺して食べ、食への渇望をもち、飢えを本性とし、飢えに逼られる。〔対応：立世 219c7-21爾～〕

Ｌ81　一昼夜の間に幾百の生類が死ぬ。・・すべて同じ（cf. Ｌ11）。〔対応：立世 219c21-22以～〕

Ｌ82　［国が消滅して後に残った］村と市場町が次第に消滅する時が来る。［いくらかの］家々が生き残る。僅少の、残った［家々］はあちらこちらで［散り散りに存し、それぞれ］一つの地域に［あるだけとなる］。〔対応：MSK 4.3.11; 立世 219c22-23時～〕

Ｌ83　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、・・すべて同じ（cf. Ｌ8）。そのような［悪い］行いをもつ者たちに天は六［、七］年間雨を降らさない。天が六［、七］年間雨を降らさないので、水を見ることすら困難になる。まして飲むことは言うまでもない。大海［であった所］での、淵を除いて［水がない］[85)]。［そこに］掘られた井戸が見られる。そこで生ける者たちは魚・亀・クンビーラ鰐・マカラ（摩竭魚）・スンスマーラ鰐を殺して食べるが、飢えに逼られる。〔対応：立世 219c23-220a9爾～〕

Ｌ84　一昼夜の間に幾百の生類が死ぬ。・・すべて同じ（cf. Ｌ11）。〔対応：立世 220a9-16以～〕

Ｌ85　［国・村・市場町が消滅して後に残った］家々が次第に消滅する時がくる。このようにして人間たちは散り散りに有り、あちらこちらで［生き残りが］一つの地域に［いる］。〔対応：MSK 4.3.11; 立世 220a17是～〕

Ｌ86　人間たちは非法の［淫欲に染著し］、[p. 189]［・・（cf. Ｌ8）。］そのような［悪い］行いをもつ者たちに、中間劫は残り七日を有する。その七日間に大半［の人］が死ぬ。〔対応：立世 220a17-29爾～〕

Ｌ87　生き残りとなった、ある所のある者たちは、男であろうと女であろうと、

如法に生きる人間であれば、［人類の］種子に等しいものとなる。人間ならざる者たち（非人）はそれらの者たちを［守護し、警護し、保護下に置く。］彼らの毛穴から生命力を注ぐ。『これらの人々を断絶せしめるな』と。〔対応：MSK 4.3.22; 立世 220a29-b4時～〕

L88　七日が過ぎると、彼らの飢饉は終息する[86]。人間ならざる者たちは立ち去り、雨が降る。［新しい］劫が出現する[87]。〔対応：立世 220b4-8過～〕

L89　［あらゆる］善法が確立する。幸福があり、無病があり、大きな同情心が彼らに起こる。大きな同情心が起これば、慈しみの心が起こる。慈しみの心が起これば、非暴力［のやさしい心］が起こる。非暴力［のやさしい心］が起こる時、彼らは互いを見て、幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、抱擁して、過ごす。あたかも［今の人々が］長く異郷にいて留守であった愛しい友を見て、［幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、抱擁して、過ごすように、まさに同じ様に、彼らは互いを見て、］とても幸福を感じ、楽しみ、愛情を感じ、抱擁して、過ごす。そして彼らは彼らと同居する（男女として共寝をする）。〔対応：MSK 4.4.1; 立世 220b8-14一～〕

L90　寿命が10年であるかの人間たちから実に、他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、より美しい容姿、より大きな能力、より大きな神通力、より大きな威神力をもち、彼らの寿量は２万年である。このすぐれた恵みは、この中間劫に生まれた人間たちにとって、自然に起こる。それはなぜか。［人々の］如法の行為のゆえ、公正な行為のゆえ、善い行為のゆえ、その結果を得る。〔対応：立世 220b15-19是～〕

L91　その生ける者たちは、様々な善い行為（業）をそなえる。身の善行・口の善行・意の善行をそなえ、身体が破壊した後、死後に、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）で死んで転生し、この世界に戻ってくる。ここで
32 彼らは［正法を行い、生まれつき（自性）賢善なる者、］生まれつき浄らかな者、生まれつき浄らかな種類の者であり、気高い品性をもち、高徳なる性質をもつ者である。彼らは殺生・偸盗・邪淫・不妄語・悪口・両舌・綺語を離れ、貪なく、瞋恚なく、正見をもつ。彼らは母と父を敬い、沙門とバラモンを敬い、一族の長老を敬い、様々な善い法（性質）をそなえる。［p. 190］ それらの行い

（業）は長命に導き、少病に導き、美しい容姿に導き、大偉力に導き、高貴な部族（高い階級）に生まれることに導き、富財に導き、大功徳に導く。〔対応：立世 220b19-28是～〕

Ｌ92　このような行いをそなえた、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 220b28-c1是～〕

Ｌ93　以上が、飢饉による、生ける者たちにとっての旱魃、［あらゆる穀物に対する］無雨による、この第３中間劫の終わりである[88]。［その終結は］別の［第４の中間劫］へ導く。これ（２万歳）は［第４］中間劫の第１番目の『成立の頂』といわれる。〔対応：立世 220c1-3如～〕

Ｌ94　更に、寿命が２万年であるかの人間たちから他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、・・すべて同じ（cf. Ｌ23）・・より大きな威神力をもち、彼らの寿量は４万年である。・・すべて同じ（cf. Ｌ23～Ｌ24）。〔対応：立世 220c3-16是～〕

Ｌ95　このような行いをそなえた、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 220c16-18是～〕

Ｌ96　これ（４万歳）は［第４］中間劫の第２番目の『成立の頂』といわれる。〔対応：立世 220c18-19如～〕[89]

Ｌ97　更に、寿命が４万年であるかの人間たちから他の人間たちが生まれるが、彼らはより長寿、・・すべて同じ（cf. Ｌ23）・・より大きな威神力をもち、彼らの寿量は８万年である。・・すべて同じ（cf. Ｌ23～Ｌ24）。〔対応：立世 220c19-221a1次～〕

Ｌ98　このような行いをそなえた、その人間たちは、福徳の行為に依って、多くの福徳の功徳を生じさせ、身体が破壊した後、死後に再び、善いところ、天界に生じる。彼らはそこ（天界）に長時にわたって住する。〔対応：立世 221a1-3是～〕

Ｌ99　これ（８万歳）は［第４］中間劫の第３番目の『成立の頂』といわれる。〔対

応：MSK 4.4.4; 立世 221a3-7如～〕

L100　その時に人間たちは８万年の寿量をもつ。娘たちは五百歳で、嫁ぐに適する。〔対応：MSK 4.4.5; 立世 221a7-9所～〕

L101　その時に人間たちは次のような患い（病）をもつ：大小便・寒さ暑さ・［性の］欲求・飢え・老い。〔対応：MSK 4.4.11; 立世 221a9-10是～〕

L102　その時に国々は富み栄える。［p. 191］村や市場町は鶏の飛べるほどの距離を隔てて互いに隣接する（密集した状態となる）。〔対応：MSK 4.4.7; 立世 221a10-12如～〕

L103　わずかの耕作地に、あるいは樹に、多くの穀物［や果実］が生じる。その時に人間たちはわずかな［仕事の］努力の結果で生計を立てる。すべての者は、主に宿世の業果を享受する。彼らがもつそれらの多くの生活用品はすべて、良い性質で出来ている。〔対応：立世 221a12-15耕～〕

L104　［また再び彼らに］十不善業道が現れない限り、究極（寿命の最高点）に達した状態の彼らには、［８万歳の］寿命による、不可数の［久しい］時間が持続する。〔対応：MSK 4.4.12; 立世 221a15-16壽～〕

L105　［その後再び］十不善業道が現われる時、彼らの寿命は十年ずつ減少する。百年が経過すると、［寿命が］十年減少する。次第に、百年が経過するたびに、［寿命が］十年減少する。［最後には］最高で十年という、わずかそれだけの寿命しか彼らはもたない時代がくる。〔対応：立世 221a16-22從～〕

第11『小三災の章』、おわる。

注

1）「時代の濁り」（samayakaṣāya）とは蔵文§127の対応文から「五濁」（snyigs ma lngas = pañca kaṣāyāḥ）の意味であると理解される。五濁とは命濁・煩悩濁・劫濁・衆生濁・見濁の５項目をいい（cf. Mvy 2335～2340）、倶舎論世間品第94頌ab釈（ed. Śāstrī, I, p. 547；冠導巻12-8b）、順正理論（T29 524a8-17）、顯宗論（T29 857b7-16）等で説明される。五濁の概念は小乗大乗が共有するもので、出典として小乗経では雑阿含905経（T2 226c2-3）、別訳雑阿含 121経（T2 419b20-21）等があり、また大乗経では小Sukhāvatīvyūha（阿弥陀経末尾）、大悲経（T12 972b7）、悲華経（T3 174c8）、称讃浄土仏摂受経（T12 351b4-5）、菩薩行方便境界神通変化経（T9 304c19）、大法炬陀薩尼経（T21 708c7）等がある。

２）写本 AB の jagati puromatayābhisaṃmatāḥ の読みに問題があり、何らかの修正が必要である。そこで puromatayā を *purāmatayā と読む。つまり「以前に（*purā）人々における（jagati）未熟性の故に（*āmatayā）尊敬された者たち（abhisaṃmatāḥ）」と解釈した。なお別案として、Okano (1998)ではこの箇所を *saromatayā と読んで、「世間における（jagati）随順性（sa-romatā = sa-lomatā = anulomatā?）の故に」と解釈したのだが、やはり *saromatā の語形は不自然すぎ、新たな案として *purāmatayā と読んでみた次第である。

３）前詩節（4.2.1）では邪見（mithyādṛṣṭi）の出現を説いたので、本詩節では正命の逆としての邪命（mithyājīva）の出現を説いていると思われる。特に農耕や牧畜に対する深い嫌悪感は、MSKの第４章１節までのアッガンニャ神話の文脈から理解される。

４）原文は śramajam api tilekṣugorasaṃ rasam itaraśramato vyamuñcata で、ここに rasa の語が二回出てくるが、牛乳（go-rasa 牛の汁）の精髄（rasa）とは、ギー（ghṛta）である。牛乳の汁（rasa）から生じてくるエッセンス（rasa）がギーなのであろう。

５）前の二つの詩節（4.2.3～4）では資具衰損（食の悪化）が説かれたが、本詩節では寿量衰損（寿命の低下）が説かれる。これらの現象は閻浮堤の人々の十不善業道の結果と見なされる。大毘婆沙論 T27 588b1-9 を参照。

６）MSK 4.2.6 の詩節はやや唐突な感があり、時代の区切り線がこの詩節の前までを境に一本引かれているのを感じる。劫初以来都市や町を作って都会的な社会生活を営む習慣を持たなかった人類が、地上に都市等を建設し始めたことを説明するこの詩節から、いよいよ神話的時代から歴史時代、インドの都市国家分立の時代に入ったことがわかる。強いてこの詩節に対応する記事を他の文献に探せば、世記経がアッガンニャ神話の文脈の中で語る「爾時先造瞻婆城。次造伽尸婆羅捺城。其次造王舍城」（T1 148b6-7）の文がそれにあたると思われる。

７）この蔵訳の文は少し奇妙であり、MSK 4.2.6 ab を見ると、その文では主語は大地（medinī）であって、都市等ではない。それゆえこの蔵文も主語として「大地」を補うべきで、「［大地は］至る所、あらゆる地方において、村々や町々や都市など、人々の住居によって飾られた」と解釈すべきであろう。

８）この文献Ｘの§133の内容に対応するMSKの詩節はない。MSKは三過去仏の出世を抜かして、ただ釈迦牟尼仏の出世のみを述べるが、この三過去仏の省略ないし無視(?)の背後に、MSKの作者のどのような配慮や信仰があったのかは不明である。なお三過去仏の名は部派によって異なるので、正量部所属の可能性が高い Karmavibhaṅga が伝承する梵語名に合わせて訳してみた。ただし Krakucchanda / Krakutsanda, また Konāgamuni / Kanakamuni の、どの語形が正量部の正規の伝承形なのかで迷う。Cf. Noriyuki Kudo (2004): *The Karmavibhaṅga*, <Bibl. Philol. et Philos. Buddhica VII>, Tokyo, pp. 131, 150, 166, 194, 330, 332.

９）正量部では、釈迦仏はカリ・ユガの仏、という位置づけであったらしい。MSKの作者もカリ・ユガという時代区分の表現を重要視していたことは、この第４章第２節の章名が『カリ［の時代］に入る』（Kali-praveśa）であることからわかる。上座部系のインド仏教徒

が四ユガ説の宇宙論的枠組を利用して、閻浮堤の人類のアッガンニャ神話的歴史を再構築している例として、このMSKと文献Xの記述のほかに、有部の正法念処経巻67の記述がある（T17 399b16-c20）。そこで説かれている「劫初時」とはクリタ、「第二時」とはトレーター、「第三時」とはドヴァーパラ、「第四鬥時」とはカリを意味すると思われる。「劫初時」は、光音天から降りてきた人類が善なる心をもち、地皮（rasa / rasā）を食べ、八万四千歳の寿命を保ち、三種の患いしかもたない時代であったが、「第二時」になって人に不善が出てきて、地皮を穢濁不浄なものに変えてしまい、「第三時」に地皮が消滅し、食が原因で人に無数の病気が起こり、「第四鬥時」には一切の好味が消滅して、人は莠子や鵲豆や魚肉や菜根などを食べ、多くの病苦をもち、早く老い、気力がなく、寿命は百年、身長は一弓になる、という。恐らく２～３世紀以降に、インド仏教徒の宇宙論の中に、本来異質な四ユガ説が入り込んできて、このような形での阿含の宇宙論の再構築を促したと思われる。

10）有為無為決択第８章の蔵文（文献X）§§134, 137-143の箇所は、正量部が自らの部派の結集の歴史をインド仏教の流れに位置づけて物語る、歴史的新資料として最も注目され、最初に Peter Skilling によって英訳がなされ解説された。Skilling (1982): “History and Tenets of the Sāmmatīya School”, *Linh-So'n — Publication d'études bouddhologiques*, 19, pp. 38-52.　並川孝儀も正量部の成立年代の議論において、この§§134-143の文を和訳している：並川 (2002)：「正量部の成立年代」、『櫻部建先生喜寿記念論集　初期仏教からアビダルマへ』（平楽寺書店）87-88頁を参照。

11）この蔵文において、動詞 ’chags pa を「破壊・摧破する」の意味にとれば、「世尊・釈迦牟尼は、人々の罪ある行いを大いに摧破した」という意味になるが、しかし蔵文の背後にある梵文は MSK 4.2.8 ab の文に近かったと思われるので、それゆえここでは動詞 ’chags pa を *parāyayau（立ち去った）に相当する意味で解釈し、「消え去った」と訳した。

12）写本 AB に誤りがあり、確信をもって修復できないので、校訂文の一部が欠ける。ここには恐らく一つの語（三母音から成る）が入るはずである。修復のための案として、*edhayac という語を補い、ādadha *edhayac-chriyaṃ (ādadhe + edhayat- + śriyaṃ) と読むことを提案したいが、その場合には、「あれほどの、*［人々に］幸福をもたらす（世を繁栄させる edhayat-)、栄光を置いた」という意味になる。

13）ここで文献Xに「五道」ではなく「六道」（’gro ba drug）という語が使われていることは、正量部が五道説ではなく六道説を採っていたことの証拠となる。また立世論も、五道説ではなく六道説であることが、すでに渡辺楳雄に指摘されている。渡辺の国訳一切経論集部１における立世論の解説（132頁）を参照。立世論には地獄畜生餓鬼の三悪趣ではなく、それに阿修羅道を加えた四悪趣が繰り返し説かれており（216a14、217c19、219c5、222c22）、また「衆生生六處…六處受苦惱」という句がある（178a11-12）。有為無為決択を研究した並川孝儀も、その第18章に引用された正量部説が、六道説を採ることを指摘した。並川 (1992a)：「正量部の非福説」、『印度学仏教学研究』40-2、523頁を参照。

14）MSK 4.2.12-13 の2詩節は、第一結集（五百結集、Rājagṛha 結集）と第二結集（七百結集、Vaiśālī 結集）の出来事を伝える。学界にとって目新しい、この正量部から出た資料によって、最初の二つの結集の伝承に関しては正量部も他部派と違わない伝承を共有して

いたことが判明する。結集に関する諸部派の資料を比較することによって、私たちが気づくのは、第二結集までの伝承の記憶はどの部派も共有しているが、第三結集以後はそうではなく、それぞれの部派が独自の結集を伝えていることである。正量部の母体となる犢子部も、パーリ上座部や有部と同様に、第二結集の後はもはや他の部派と結集を共有することなく独立への道を進み、涅槃後四百年代に第三結集として自部派の結集を行った（MSK 4.2.14）。全仏教徒の結集であった第二結集から、犢子部が自部派独自の第三結集を開くまでに三百年かかっている。それは第二結集後の上座部の部派分裂のプロセスが、約三百年かかってゆっくりと進んだことを物語る。上座部の分裂運動は島史・大史が伝えるほど早急なものではなかったことの重要な証拠となる。

15）本詩節と次詩節は、犢子部から正量部が生じたことを証明する最も信頼出来る典拠となる点で、重要である。犢子部の成立から正量部の成立まで、三百年もの時がある。この三百年の間に恐らく Dharmottarīya, Bhadrayānīya, Ṣaṇṇagirika の三つの子部派が犢子部から分出して栄え、最後に分出した（それゆえ最も新しい時代に適合した教理を有する）部派が正量部であったらしい。なお Vātsīputra が出たのは涅槃後の第四百年であるという主張については、他の典拠として Bhavya の Nikāyabhedavibhaṅgavyākhyāna の中に説かれる、所謂「Bhavya 第三説」からも支持される。「Bhavya 第三説」は、正量部独自の歴史伝承に基づくものと学者に見なされるが、その歴史伝承の中には、涅槃後137年に根本分裂が起こり、その後64年間、僧伽は分かれて争ったが、それから200年経って、上座の Vātsīputra が結集を行った、という内容の記述がある。137＋63＋200＝400で、Vātsīputra が結集を行ったのは涅槃後の四百年であることになり、本詩節の数字と見事に一致する。拙稿「犢子部と正量部の成立年代」、『西日本宗教学雑誌』26輯（2004年）45-46頁を参照。

16）固有名 gnas ma bu pā ra bā tsi pu tras において、pā ra という語が、ヴァーシーの息子（gnas ma bu）とヴァートシープトラ（bā tsi pu tra）の間にあるが、その語の意味は不明である。彼の呼び名であろうか。

17）本詩節は正量部という部派の形成が、聖サンミタによる結集によるものであることを語る。正量部自らの歴史資料としての、本詩節の記述により、正量部の宗祖の名が（ārya-）saṃmita であることが判明したので、正量部の名称として学界でこれまで諸学者に頻繁に用いられてきた saṃmatīya という語形は間違いであったことがわかる。sāṃmitīya と訂正されるべきである。またこの正しい宗祖の名に関する他の典拠として、次のものがある。sāṃmitīyāḥ という語形は梵文 Prasannapadā に出る（La Vallée Poussin ed., Bibliotheca Buddhica IV, 148.1, 192.8, 276.2）。十八部論も「三彌底」（san-mi-ti）と音写する。中期インド語の語形として、パーリ史書で sammitiyā (or v.l. sammitiya, N. pl. m., cf. Mahāvaṃsa V 7+), sammitī (or sammiti, N. pl. m., cf. Dīpavaṃsa V 46; Mahāvaṃsa V 7）という語形が知られる。また Mathurā の石版銘文（*EI*, XIX, p. 67）でも samitiyāna (G. pl. m.)という語形が知られる。

18）文献Ｘ蔵訳はここで宗祖サンミタの名を gnas brtan (= *sthavira) thub pa (= *muni) mang pos bkur ba (= *saṃmita) と訳す。つまり「上座・牟尼である、衆多により尊敬

される者」という意味である。この「衆多により尊敬される者」の訳の原語は、*mahā-saṃmata ではなく、単に *saṃmita であると思われる。つまり動詞接頭辞の sam- を「衆多により」（mang pos）と訳した可能性が高い。なぜなら蔵文§84で出てくる人類最初の王である Mahāsaṃmata 王の名はその箇所で、mang pos bkur ba chen po zhes pa'i rgyal po (=*mahāsaṃmato nāma rājā) と訳されており、逐語訳すれば「偉大な、衆多により尊敬された者、という王」という意味であるが、ここでは「偉大な」(*mahā-）という形容詞が付けられている。すると「衆多により尊敬された者」の原語は、*mahāsaṃmata ではなく、*saṃmata でなければならないはずで、さもなければ原語は *mahā-mahā-saṃmata であったことになってしまう。なおチベット人は聖者 saṃmita を世界最初の王 saṃmata と同じ名前の様に訳してしまったことになるが、saṃmita と saṃmata をほぼ同義と捉えたのであろう。ちなみに文献Xは聖正量部という名称を 'phags pa mang pos bkur ba'i sde pa と訳しているが、これも原語は *ārya-sāṃmitīya-nikāya であるはずである（ *ārya-māhā-sāṃmitīya-nikāya ではない)。

19）本詩節は、聖 Saṃmita の結集の約百年後に、さらにもう一回結集が行われたことを伝える。この Bhūti[ka] と Buddhamitra による結集は、正量部内部での新しい部派の誕生を意味するのかどうかは不明である。ターラナータの仏教史第42章の記述（[Tr.] Lama Chimpa & A. Chattopadhyaya, p. 342）によれば、パーラ朝の最後（12世紀）までインドで生き残っていた仏教部派は少数であり、正量部系統の部派としては2部派、つまり Kaurukulla 部と犢子部の名だけが述べられている。すると本詩節で語る最後の結集とは、正量部（の内部）で Kaurukulla 部が生まれた結集である可能性がある。MSKの作者 Sarvarakṣita 自身が、12世紀当時まで生き残っていた正量部（の一派）に属していたはずであるから、自らの正量部の系統とは異なり昔に消滅してしまった他の正量部系の部派（Avantaka 部など）の正統性を証するような結集をわざわざ語るはずがない。ただすでに彼の時代には Kaurukulla 部以外には、犢子部を除いて正量部系の他の部派が無いので、Kaurukulla 部に属していたとしても、自らを Kaurukulla 部とは呼ぶ必要はなく、単に正量部とか根本正量部とか呼んでいたことも考えられる。—— なお正量部にとって涅槃後の第八百年とは一体西暦の何世紀にあたるのか、という問題については、拙稿「犢子部と正量部の成立年代」、『西日本宗教学雑誌』26輯（2004年)、44頁以下で扱った。結論だけをいえば、私は Bhūti[ka] と Buddhamitra による第五回結集は紀元後260年頃にあったと推測する。

20）文献Xの諸版ではどれも bhu ti ka とあるが、この *bhutika の語形は bhūtika と訂正されるべきであろう。bhūtika は bhūti に -ka の接尾辞をつけたかたちであり、MSK では bhūtika という人物が、韻律の都合で、bhūti と呼ばれていると見てよい。

21）MSK 4.2.17と18の二つの詩節には、ブーティカとブッダミトラによる次の三点の主張が説かれているといえる。主張1〈現在の劫は第9番目である〉、主張2〈七百年が劫の終わりまでに残されている〉、主張3〈やがて来る劫末の時には、胡麻・砂糖黍・凝乳などにおいて、それぞれ胡麻油・砂糖黍汁・ギーなどが消滅する〉。この三点は、正量部の最後の部派結集の事件と係わった問題のようであり、部派固有の教義理解の鍵になると思わ

れる。私自身は次の論文によってそれらを理解しようと試みた。第１の主張については、「正量部の伝承研究(2)：第九劫の問題と『七佛経』の部派所属」、『佛教文化学会十周年・北條賢三先生古稀記念論文集　インド学諸思想とその周延』（山喜房、2004年）166-189頁。第２の主張、特にその強い終末意識については、「インド仏教正量部における終末観」、『哲学年報』62輯（2003年）81-111頁、ならびに「正量部における現在劫の終末意識をめぐる問題点」、『印度学仏教学研究』51巻１号（2002年12月）388-393頁。第３の主張については、「正量部の伝承研究(1)：胡麻・砂糖黍・乳製品の劣化に見る人間の歴史」、『櫻部建先生喜寿記念論集　初期仏教からアビダルマへ』（平楽寺書店、2002年）217-231頁で論じた。

22）稲が殻（tuṣa）をもつようになって（cf. MSK 3.2.1）、稲の貯蔵が可能になり、個人財産が生まれ、盗難や嘘や暴力が生じ、田が私有地となり、王が必要になり、階級社会に変わっていった経緯はアッガンニャ神話（MSK第２章４節以下）に詳しく説かれている。正量部はこの稲における殻の出現をもって、現代の困苦の時代の幕開け、住劫第９劫の開始時と見なす。

23）私が「軽薄さの報い」と訳した箇所は、原文に問題がある。写本Ａは calatāha[tu]m と、写本Ｂは catatāhatam と読める。それに私は修正を加えて、catatā-*phalam と読み、「軽薄さの報い」と訳した。しかしこの修正も確信の持てるものではない。もし catatāhatam という写本Ｂの読みをあくまで尊重するならば、「軽薄さに打ちのめされた［状態］は (calatāhatam) すでに過ぎ去っている」と訳せるかもしれない。

24）飢饉中間劫・疾疫中間劫・刀兵中間劫という三種のカタストロフ（小三災）の名が揃ったのはアビダルマ文献形成の時代らしく、最初、阿含・ニカーヤ文献の形成期には、刀兵劫のみが説かれた。パーリ転輪王師子吼経やその並行文献（漢訳長阿含転輪聖王修行経と中阿含王相應品の転輪王経）には刀兵劫のみが説かれる。しかし転輪王経の並行文献の中で、増一阿含巻48禮三宝品の第４経（T2 806c-810b）は転輪王経関係の経の中で最も古い形を残すらしく、刀兵劫を説かないので、本来は転輪王経は刀兵劫を説かない形であったらしい。ある時期に刀兵劫の概念が入ってきて、経にその記事が付加されて、現在のパーリ転輪王師子吼経などに見られる形になったと推測される。このように刀兵劫の記事が聖典に入ると、やがて刀兵の他に飢餓・疾疫の二つの中間劫を説いて、三つで１セットと見なす経も出てきた。それが長阿含世記経である。この経はその三中劫品において、刀兵劫・穀貴劫（飢餓劫）・疾病劫の説明がなされる。またこの世記経と同じ法蔵部系統のパラレルとして、大樓炭経や起世経や起世因本経があり、そこでもほぼ同じ様に小三災の三つが説かれる（世記経の三中劫品第11＝大樓炭経の小劫品第11＝起世経の劫住品第10＝起世因本経の劫住品第10）。世記経は、法蔵部独自の聖典結集により長阿含への編入を認められた新しい経で（cf. Okano (1998), S. 49-50）、経と論との中間的な性格をもち、阿含聖典からアビダルマ論書への過渡期に形成された作品と見なされるが、たぶんその経と同じ頃に、犢子正量部の立世阿毘曇論や有部の施設論世間施設が、相互に刺激しあい、似たような制作意図をもって、それぞれの部派で形成されたと思われる。それらの論書においても、それぞれの部派の伝承に基づく小三災の説明がなされる。有部の文献で小三災が揃って出てくるのは恐らく施設論が最も古く、その記述は大毘婆沙論、雑阿毘曇心論、倶舎論、順正

理論等に受け継がれる。パーリ文献では Sumaṃgalavilāsinī (III, p. 854) 等の、アッタカター文献で小三災が一組で出てくる。小三災（劫末思想）と末法思想は本来別々に発生した思想であったが、小乗文献で出来た小三災の概念は特に発展することもなく、末法思想に呑み込まれたかたちで、末法の時代を憂える大乗経典の中で用いられてゆく。

25）小三災が各劫に三つ揃って来るか、それとも 3 劫ごとのローテーションで別々に来るのか、という議論が論師の間でなされていたことが、倶舎論世間品99頌の称友疏から知られる。瑜伽師地論（T30 285c-286a）は前者の立場を取るが、小乗諸部派は大体は後者の立場を取る。MSKと文献Ｘの立場はその両者の意見を折衷させたもので、第 9 劫の劫末には飢饉が主となり、疾疫と刀兵が随行して現れるというものである。つまり 3 劫ごとのローテーションで主が入れ替わるが、各劫に残りの二者が随行として現れる、という考え方である（cf. MSK 4.3.4）。これはMSKと文献Ｘがもつ時代の新しさを感じさせるもので、同じ犢子正量部の文献でも、古い時代の立世論においては、この折衷的な意見は見られない。単純な 3 劫ごとのローテーションの考え方であり、立世論（T32 215b）と Loka-p（I, p. 177）によれば、そのローテーションの順序は（1）疾疫（2）刀兵（3）飢饉、である。そのローテーションの結果、今の第 9 劫は飢饉の担当になるわけである。〔☜ **立世とMSK・Ｘの相違点**〕このローテーションの順番は部派によって意見が違っていたらしい。有部では（1）刀兵（2）疾疫（3）飢饉、の順である（大毘婆沙論 T27 693a8、雑阿毘曇心論 T28 959b18）。法蔵部の世記経の三中劫品（T1 144a-c）では（1）刀兵（2）飢饉（3）疾疫、の順で説かれる。大樓炭経、起世経、起世因本経も同じ法蔵部系列なので、世記経と順序が同じである。ちなみに小三災が各劫に揃って一緒に来るという立場を取る瑜伽師地論は、人寿三十歳時にまず（1）飢饉が、人寿二十歳時に（2）疾疫が、人寿三十歳時に（3）刀兵が現れるとして、各劫における三災の段階的な出現を説く。大乗の優婆塞戒経でも、小三災が瑜伽師地論と同じ順で説かれる（T24 1072b4）。なおパーリ上座部は、この小三災の思想がインド亜大陸の諸部派において確立した後に、やや遅れてその思想を知ったものの、しかしスリランカや南インドの風土的な雰囲気として、西インドや西北インドの諸部派ほどに終末観（時代の危機感）が強くなく、中間劫宇宙論にも大して関心がもてなかったために、小三災についてもあまり独自の意見を発達させることはなかったようである。

26）つまり慳貪（mātsarya）が飢饉劫を、害心（durita 罪深さ・邪悪さ・悪意）が疾疫劫を、瞋恚（krodha）が刀兵劫をもたらす。これとよく似た発想の説明はパーリの註釈文献にも見られ、民衆に貪が満ち溢れること（lobhussada）が飢饉劫を、瞋が満ち溢れること（dosussada）が刀兵劫を、痴が満ち溢れること（mohussada）が疾病劫をもたらす、と Sumaṃgalavilāsinī (Thai ed., VI, p. 39 [in: BUDSIR IV]) 等はいう。ここで貪欲と慳貪（lobha : mātsarya）、瞋恚と怒り（dosa : krodha）の二者は意味的によく対応するが、癡と害心（moha : durita）の関係はやや微妙である。

27）先の注25でも触れたが、小三災の起こる順序については、部派により意見が異なっていて、有部の蔵訳世間施設では刀兵劫→疾疫劫→飢餓劫の順序で説き（倶舎論世間品もその順序に従う）、長阿含世記経の三中劫品は刀兵劫→飢餓劫→疾疫劫の順序で説く。このように刀兵劫を最初に置くのは、小三災の概念の発達から考えてごく自然である。なぜなら

阿含・ニカーヤ文献が形成された時代には刀兵劫しか説かれていなかったが、その後の時代に疾疫劫と飢餓劫が追加された。つまり聖典にある刀兵劫の記事に、付加増広がなされる形で、小三災の説明が小乗文献中で発達していったために、刀兵劫の記事が最初に来るのは自然である。しかし三種のカタストロフが出揃った後に、現在の時代における重要度の点から、特に飢餓劫が重視されるに至り、正量部では現在の中間劫は飢饉によって滅びるに違いないという信念が定着した。これは飢餓による終末観の伝承がもともと教団内か民間に伏在していたか、それとも丁度その時代（アビダルマ文献形成の時代）の世相、相次ぐ飢饉によって人類の滅亡が現実となりつつあると考えざるを得なかった状況を反映しているのであろう。この飢餓劫の重視により、MSKと文献Ｘでは語る順序を逆転させて、最初に（4.3.4）飢餓劫を説く。それに対して立世論巻九は、小三災疾疫品→小三災刀兵品→小三災飢餓災品という順序で記述してゆく。これは Loka-p も同様である。立世論と Loka-p では、第１中間劫末には疾疫が、第２中間劫末には刀兵が、第３中間劫末には飢餓が、人類の大半を滅ぼすと見なされるため、住劫の20中間劫に現れて来る順番に従って、疾疫・刀兵・飢餓という順番で三つの章を組み立てたのであろう。立世論は犢子正量部の古い宇宙論を物語る作品であり、それに対して、MSKと文献Ｘは正量部の新しい宇宙論を代表する。MSKと文献Ｘが構想する住劫の宇宙年表によれば、第１中間劫から第８中間劫の間は、小三災は起こらない。すると住劫に最初に現れるカタストロフは第９中間劫の終わりの飢餓であることになるので、MSKは小三災の説明を飢餓から初めて（4.3.5）、その後は立世論の順序と同じに、疾疫（4.3.9）→刀兵（4.3.12）の順序で解説してゆく。〔☜ **立世とMSK・Ｘの相違点**〕

28）「肉によって生きる糧を手に入れるだろう（＝肉による生計を得るだろう）」の文で、「手に入れるだろう」の訳に対するチベット訳の原文は bskal pa ’byuṅ bar ’gyur ro「劫が現われるだろう」であるが、その句は MSK 4.3.6b の kalpayiṣyanti「～を入手するだろう」の語に相当し、その梵語の表現が誤訳されたものと見て、ここでは梵文に従うかたちで訳した。

29）季節の巡りの不順に関しては、阿含の転輪王経類には記述が見当たらないが、阿毘達磨大毘婆沙論巻113（T27 588a23）や倶舎論業品85頌ab釈（Śāstrī ed., I, p.711）等における、十不善業道の各々の果報としての『一切外物』の変化に関する説明の中に、気候の不順（viṣamartupariṇāmāḥ）が、十不善業道第七の綺語の結果として説かれる。これに関する有部資料に関しては工藤順之（2005）：「十不善業道による世界の損壊　―『カルマ・ヴィバンガ』所説の業報を巡って―」、『佛教大学総合研究所紀要別冊　仏教と自然』、102頁を参照。

30）この詩節の原文の pāda b は写本Ａでは pāpenevāpa[po]kinā と読める。その箇所をここでは pāpenevopapātinā と読んでみた。全文は upasṛṣṭātmanānnena pāpenevopapātinā / piśācānusahāyena yāsyanti vividhā rujaḥ // となる。あるいは別な案として pāpenevopatāpinā と修正して読むならば、「まるで［人間の］罪悪によって（pāpeneva）苦しめられた（upasṛṣṭa）かのように、悩害する者＝病魔？（*upatāpin）によって苦しめられた性質の食物によって、様々な疾病が、ピシャーチャ鬼をお供として、

現われるだろう」という意味になろう。しかしこれも一提案に留まる。私の先のドイツ語版では問題の箇所を pāpenevopapākinā と推測したが、その理由は、蔵訳を参照すると *paripākena の語が期待されるため、それに近い *upapākena という語を考えてみたのである。その場合は「まるで次第に熟した (*upapākin) 罪悪によって [害されたか] のように、害された性質の食物によって、ピシャーチャ鬼をお供として、様々な疾病が現われるだろう」と訳せるだろう。しかし upapāka という語彙は辞書になく、この推測は少し強引かもしれないため、今回の和訳ではそれ以外の案を出してみた。ともあれ、この箇所は問題が残る。

31) 蔵文は MSK と少し意味がずれているようであるが、無理に梵文に合わさずにそのままに訳した。

32) この蔵文を対応する MSK の文と比較すると、「自らの善福」(rang gi dge ba rnams = *sva-kuśala) の蔵訳は「自らの家系」(sva-kula) の語を誤って訳した可能性が考えられる。

33) 増一阿含の禮三宝品第 4 経（転輪王経に相当する）でも、次のように、堕落した時代の人間に現れる「五減」が説かれる：「五減遂至。人民短命・薄色・少力・多病・無智」(T2 810a16-17)。つまり人々の寿命（āyus）が短くなり、容姿の美しさ（varṇa）が失せ、力（bala）が無くなり、健康を失い、愚かになる。

34)「直後に」(de ma thag tu) と、文献Ｘのチベット文は伝えるが、その de ma thag tu に対応する MSK 4.3.18 の文の表現は、antyatāṃ nī- である。チベット訳が基づいた文献Ｘの梵語原典での表現が MSK の表現に近似するものであったとすれば、梵語の antya の語の意味を、チベットの訳者は「最後の」ではなく「直後の」(PW s.v. antya “unmittelbar folgend, am Ende eines Comp.”) と解した可能性が考えられる。小三災が過ぎ去ってその直後に、十年の寿命期が来るというのは、奇妙な見解であり、他の宇宙論にそのような記述を見い出すことが出来ない。小三災で締め括られる最後の滅亡の時期が、すなわち十年の寿命期であり、それが70年続くと理解した方が自然ではなかろうか。この70年という数字そのものは正量部特有の教義であるように思われる。── なお、MSK では、この蔵文§165の文の対応文の後に、先の§164の文の対応文がくる。MSK と文献Ｘでは文の順番が入れ替わるわけであるが、このことも、「小三災の直後に」、十年の寿命期が来るのかどうか、の問題と密接に関連している。ここで、チベットの訳者は「直後に」という解釈を取ったために、わざと二つの文の前後の順序を入れ換えた可能性が考えられる。MSK では、「直後に」という理解を取らないので、十年の寿命期の次に小三災の記述が来るのであろう。私はこれらの二つの文の順番に関しては、MSK の伝承に従った方がよいと考える。

35) 有部の蔵訳世間施設では、刀兵劫は 7 日、疾疫劫は 7 月 7 日、飢餓劫は 7 年 7 月 7 日の間続いて尽きると説く（北京版 Khu 56a3, 60a2, 61a6)。これについては福田琢 (2000)：「蔵文和訳『世間施設』(3)」、『同朋仏教』36号、53頁ならびに福田 (2001)：「蔵文和訳『世間施設』(4)」、『同朋大学論叢』84号、51頁、53頁の加藤清訳を参照。この有部の意見の伝承は大毘婆沙論（T27 693a13-b5）や雑阿毘曇心論（T28 959b23-29）や倶舎論世間品第99頌cd釈（ed. Śāstrī, I, p. 557；冠導巻12-15b)、さらには大乗の瑜伽師地論（T30 285c24-

286a6）やチベットの彰所知論（T32 231c28）や中国の佛祖統紀（T49 299b27-c11）にも受け継がれる。有部に代表されるこの7・77・777の伝承は、法蔵部の世記経にも、犢子正量部の立世論にも見られないが、MSK と文献Ｘによって、正量部においてもある時代から正式に採用されたらしいことが知られる。〔☜ **立世とMSK・Ｘの相違点**〕この事実は有部のアビダルマ教学が正量部の新しい教理に影響を与えたらしいことの、一つの証拠となる。立世論と Loka-p は、どの小三災も７日で終わると説いており、阿含・ニカーヤ聖典の刀兵劫７日の記述をそのまま他の二つの小三災にもあてはめただけの、素朴な反復にとどまっている。世記経は、刀兵劫が７日で過ぎ去ることには言及するが、他の二つの小三災がどのくらい続くかについては触れていない。

36）小三災の時代の人々が死後に悪趣に堕ちるという記事は、転輪王師子吼経やそれに対応する阿含経典における、刀兵劫の記述では出てこないが、小三災の記述がより発達した段階を示す宇宙論書になると、そのような記事が出てくる。法蔵部の世記経は「刀兵劫の時の人々は地獄に堕ちる」(144b23-24)、「飢餓劫の人々は餓鬼界に生じる」(144c7-9) と説く。ただしこの世記経では「疾疫劫の人々は天界に生じる」(144c28-145a2) と説く点が、立世論等と違っている。面白いことに、パーリ上座部のアッタカターもこの法蔵部の伝承と全く同様に、飢餓劫の人々は餓鬼界に、疾疫劫は天界に、刀兵劫は地獄に生まれることを説く（Sumaṃgalavilāsinī, Thai ed., VI, p. 39 [in: BUDSIR IV]）。有部の蔵訳世間施設では、刀兵劫と疾疫劫の人々は地獄に、しかし飢饉劫は餓鬼界に生じると説く（北京版 Khu 56a5, 60a2, 61a5）。福田 (2000)：前掲、53頁、福田 (2001)：前掲、51頁、53頁の訳を参照。犢子正量部の立世論では、小三災のいずれの時代においても、人々は地獄餓鬼畜生阿修羅の四悪趣に堕ちるという記述が何度も繰り返される。小三災の三つすべてにおいて同様に悪趣への転生を説く点で、MSK の本詩節は、立世論の主張と合致していると思われる。

37）「これによって」と訳したチベット文 ’dis na は、対応する MSK 4.3.20a の文と合わせてみると、itaḥ の語を訳したものである可能性が考えられる。すると、’dis na (= itaḥ) は「これによって」（＝この［理由］によって）ではなく、むしろ MSK のように「この世界から」と訳すべきかもしれない。

38）この詩節の私の解釈を示すと、次のようになる：森の火事を得た木々の中で、一本の木だけが或る場所でぽつんと孤立し他と乖離していたために、また最も樹液にあふれていたために、焼けずに燃え残るように、終末のカタストロフを得た人間たちの中で、或る場所の或る一人の人間が、他の者たちから離れていたため、死なずに生き残り、他の人々に対して慈しみの思いをもつ者、最もやさしい情感に溢れた者となった。このような本詩節の内容と関連する記述を小乗文献に探すなら、中阿含転輪王経の次の文がそれにあたると思われる：「爾時亦有人、生慚恥羞愧、厭惡、不愛彼人。七日刀兵劫時、便入山野、在隱處藏。過七日已、則從山野於隱處出、更互相見、生慈愍心」(523b5-7)。つまり、或る人が慚恥羞愧を生じ厭悪して彼の同時代人たちを愛さず、山野に入って隠れていたが、刀兵劫の七日が過ぎた時に、山野から出てきて、他の人々と相見て、慈愍心を生じた、というのである。長阿含転輪聖王修行経の相当箇所では、この人物は「智者」と表現されている：「時有智者、遠逃叢林、依倚坑坎。於七日中懷怖畏心、發慈善言。汝不害我、我不害汝。食草木子、以

存性命。過七日已、從山林出。時有存者、得共相見、歡喜‥」(41a29-b3)。この生き残った人物は長阿含世記経でも「黠慧者」つまり賢い者と表現されている（144b14)。殺戮を行う他の愚かな者たちとは離れて、智者は山野に隠れて生き残り、七日後に心に慈しみを生じたという、これらの北伝の聖典の記事は、この 4.3.21 詩節の内容と対応しているように思われる。なお、本詩節で語られているのはすべて未来の出来事であるのに、babhūva と動詞の過去形をわざわざ使っているのは、小三災が過ぎ去った後の出来事を述べているためであろうか。

39）蔵文の gzhan rnam par bral bar mthong nas を「他の者たちが離別するのを見て」とは訳さず、あえて「他の者たちと離れている状態で見て」と訳してみた。恐らく「他の者たちと離れていて、七日の刀兵劫の後で、生き残った人々を見て」という意味であるように思われる。

40）蔵文（文献Ｘ）では、「罪悪の時にも正しい道を捨てない」という修飾語（限定詞）は、守護を決意する或る者（ヤクシャ）を修飾している。しかし MSK の対応文の如く、守護される人間たちを修飾したほうが適切である。立世論にも MSK と同じ趣旨の文がある。ここではいちおうチベット文のままに訳した。

41）内のあり方、つまり善い心のあり方が、十善業道として行為される時、それに対応する形で、外のあり方、つまり外的世界の状態も善き安楽なるものに変化することを、本詩節は意味していると私は解釈した。ただし大毘婆沙論巻113の十業道の議論で、内物・外物という語が出てくる時には、内物は寿命の長さなどの人間の内的性質、外物は住居など外的世界を意味するようである：「復有説者。若由此故、令内外物有時衰損、有時増盛、建立業道。當知、此中、所居為外。壽等為内」(T27 588a11-14)。

42）『大なる［寿命］増進』に関して、MSK 5.1.3 では「まるで階段によって家の上階に上がるように、すばらしい事の連続によって、第三の［寿命の］増進に上り、人々は世の終末（pralaya）の時まで、友愛心から成るその繁栄を味わうだろう」と説かれており、この「第三の（tṛtīya）寿命増進（utkarṣa）」が、蔵文の文献Ｘがここで説く、寿命が８万歳になる『大なる［寿命］増進』にあたると思われる。寿命増進を２万→４万→８万の三段階と見なす点で、MSK と文献Ｘは合致し、また Loka-p の記述（cf. L 29）とも合致する。しかし立世論は２万→４万→６万→８万の四段階を説き、この点で Loka-p の記述に合わない。立世論と本来同じ作品であるはずの Loka-p が２万→４万→８万の三段階を説くことは、Loka-p が11世紀頃にパーリ語で再編集された際に行われた、立世論の簡略化の結果であるとは言い切れない。むしろ、Loka-p の方が古い形を残している可能性が高い。なぜなら阿含・ニカーヤの転輪王経類を見ると、人寿の増大のしかたは二倍ずつになってゆくように説かれており、人寿４万歳の後は必ず８万歳である。立世論のように４万歳の後に６万歳を置くのは、古い聖典の伝承から外れていると見なしうる。そのため Loka-p の三段階の記述が本来のかたちであり、立世論にのみ見られる６万歳の段階の記述は、恐らく後世の改変・追加であろうと思われる。〔☜ **立世とMSK・Ｘ・Loka-p の相違点**〕

43）過去分詞 edhita は女神ラクシュミーと娘との、両方の語にかかり、娘に対しては「成長させられた」という意味であるが、女神に対しては「満足させられた、光栄あらしめら

れた、幸福たらしめられた、力が増強させられた、繁栄した」という意味で使われていると思われるので、訳文では二度訳した。

44）この蔵文§175は、MSK の対応詩節と比べてみると、MSK の方が１文であるものを、２文に分けて訳している。動詞 ’phel ba「繁栄する／成長する」という動詞は梵語の過去分詞 edhita と対応しており、この動詞は MSK の対応文においては、（家庭での繁栄の女神の）「栄えること」を意味すると同時に、（娘の）「成長」をも意味するように使われている。チベット訳が基づいた梵語原本においても、恐らくその動詞 edhita が使われていたと思われる。チベットの翻訳者はその二つの意味が伝わるように、２文に分けて訳したものであろう。

45）「その他の［性質の］卓越」とは、人寿八万歳の人間は、身長が巨大になり、頭が良くなり、腕力が強くなる等の卓越をもつことを意味すると思われる。

46）MSK は「鶏鳴の［相互に聞こえるほど隣接する］場所に立つ村々によって」（kukkuṭālāpadeśasthair grāmair）という。この表現の伝統について、広く仏典を調べてみると、村々が「鶏鳴の聞こえる距離ほど互いに近い」、という伝承と、「鶏の一飛びする距離ほど互いに近い」、という伝承にきれいに分かれ、両者は相対立していることが判明する。以下、注が長くなるが、仏教文献では鶏鳴と鶏飛の二つの解釈が並行して有ることを文献学的に確認しつつ、この問題を考察してみたい。

A　鶏鳴の伝承であることが明白なもの：(A-1) この MSK の詩節 4.4.7。(A-2) 文献Ｘ§177：「鶏鳴の［相互に聞こえる］場所［となった］人の住み処たる大地すべては」（khyim bya’i brjod pa’i yul mi rnams kyi gnas sa gzhi ma lus pa）。(A-3) Maitrisimit の Hami 写本（古トルコ語）の第４章にある、“das Gackern des Huhns gehört wird”「鶏の鳴き声が聞こえる」という文（Geng Shimin & Hans-Joachim Klimkeit (1988): *Das Zusammentreffen mit Maitreya*, Wiesbaden, S. 221）。(A-4) 立世論：「州郡縣邑人民村落、更相次比鶏鳴相聞」（T32 217a23-24；219a15-16；221a11-12）。(A-5) 法蔵部の長阿含転輪聖王修行経：「村城隣比、鶏鳴相聞」（T1 41c29）。(A-6) 所属部派不明の増一阿含巻44十不善品第３経（＝竺法護訳(?)弥勒下生経）：「諸村落相近、鶏鳴相接」（T2 787c25 ＝ T14 421a29）。(A-7) 弥勒下生経：「諸村落相近、鶏鳴相接」（T14 421a29）。(A-8) 弥勒来時経：「聚落家居、鶏鳴展轉相聞」（T14 434b28）。

B　鶏飛の伝承であることが明白なもの：(B-1) パーリ聖典の経蔵に有る kukkuṭa-saṃpātika（DN, III, p. 75; AN, I, p. 159）という語に対し、パーリのアッタカターは、「一つの村の屋根の背から飛んで、別の村の屋根の背に下りることの名称たる、鶏の一飛び（kukkuṭa-saṃpāta）がそれらの場所で起こる」と解説する（Sumaṃgalavilāsinī, PTS ed., III, p. 855 = Manorathapūraṇī, II, p. 256）。(B-2) 有部の蔵訳世間施設における *Dṛḍhanemi-vyākaraṇa という経の引用：「寿命８万歳の人間たちの村や市場町や国境や王都の間は、鶏が一飛びで到達する距離になるだろう（bya gag ’phur bas slebs btsam du ’gyur ro）」（北京版 Khu 59b4-5；福田琢 (2001), p. 50 に加藤清の訳があるが、訳し直した）。(B-3) 有部の中阿含転輪王経：「村邑相近、如鶏一飛」（T1 524b25-26）。(B-4) 有部の論書、尊婆須蜜菩薩所集論：「村落相連、鶏皆飛過」（T28 770c29）。(B-5) 大衆部の摩

訶僧祇律の転輪王の世の描写：「聚落村邑、鶏飛相接」（T22 228a12-13）。(B-6) 大乗経の父子合集経（大正 No. 320）：「聚落城邑、鶏飛相至」（T11 974a17）。(B-7) 曇無讖訳大般涅槃経：「居民鄰接、鶏飛相及」（T12 539c28）。(B-8) コータン語『ザンバスタの書』の第22章（弥勒下生経に相応）：「鶏が一度飛び上がっただけで、隣の村に達するだろう」（R.E. Emmerick (1968): *The Book of Zambasta: a Khotanese Poem on Buddhism*, London, p. 308）。――以上から、鶏鳴（A）と鶏飛（B）の伝承の対立は明白であり、資料を鳥瞰すると、有部系の資料はどれも鶏飛の解釈の立場に立つらしいことがわかる。有部の律蔵文献を見ると、鶏飛の解釈を数十メートルの距離を規定する手段として使っている。十誦律は「不相接聚落界者、若鶏飛所及處」（T23 32b5）とする。薩婆多毘尼毘婆沙も、「不相接聚落者、鶏飛所及處」（T23 530a25）とする。これらの箇所では kukkuṭa-saṃpātika, -saṃpāta かそれに近い原語が使われていた可能性がある。有部においては律蔵で鶏飛の解釈がすでに定まっていたので、経や論においても律と同じ解釈をとって、鶏飛と解釈したのではないかと思われる。有部律以外で、鶏飛の解釈が確認できる律蔵はパーリ律である。その波逸提法にある kukkuṭa-saṃpāta あるいは -saṃpāda の異読（Vinaya, IV, pp. 63, 131, 295）に対してパーリの註釈は -saṃpāta の読みには鶏飛の距離、-saṃpāda の読みには鶏の歩行距離という、二つの解釈を示している（Samantapāsādikā, p. 806；この註釈文は -saṃpāda の読みを優先させて先に挙げる）。

さて、漢訳で鶏飛と訳された場合の原語は、パーリ聖典のように kukkuṭa-saṃpātika かそれに近い語であろうことは語根から容易に推測できるが、考えなくてはならない問題は、(I)「鶏鳴の訳の場合、もともとの原語が kukkuṭa-saṃpātika ではなく別の語だったのか」、それとも、(II)「原語は同一であったが、訳者により鶏鳴／鶏飛と解釈が二つに分かれたのか」という点である。まず原語で確認できるテキストの中に、kukkuṭa-saṃpātika 以外の読みはないかを見てみると、パーリのアッタカターは、kukkuṭa-saṃpādika「鶏が歩いて達する距離の」という異読があることを伝えている。パーリ律蔵にある kukkuṭa-saṃpāta に対しても kukkuṭa-saṃpāda の異読がある。しかしこれらはパーリ上座部の伝承内部の異読のようであり、また -saṃpādika や -saṃpāda の異読はどう考えても鶏鳴の解釈につながるものではない。次に梵語文献を見ると、有部律の漢訳の鶏飛の原語は不明であるものの、有部律の註釈的文献たる梵文 Vinayasūtra には、kukkuṭasyotpātya nilayane「鶏が飛んで降りたところで」という表現が捨堕法離三衣戒（605）と波逸提法の52女人共寝（1648）の二箇所にある（参照：大正大学ウメ文字梵文写本のネット公開デジタル・データ、http://www.tmx.tais.ac.jp/sobutsu/vinayasutra.html）。この他、kukkuṭa-saṃpāta-mātra という表現が Divyāvadāna 第22章にある。第22章 Candraprabha-bodhisattvacaryāvadāna, ed. Cowell & Neil, p. 316: kukkuṭa-saṃpāta-mātrāś ca grāma-nagara-nigama-rāṣṭra-rājadhānyo babhūvuḥ. しかし松村恒の博士論文によれば（Matsumura (1980): *Four Avadānas from the Gilgit Manuscripts*, p. 85）、この Divyāvadāna の第22章にあたる Candraprabhāvadāna のギルギット写本を見ると、この箇所は、kukkuṭa-saṃpātikā grāma-nagara-niga<ma-*janagaṇa-*rāja-*kṣatriyā>bhūt. とある。つまり kukkuṭa-saṃpātika の表現の方が古い本来の形であっ

た。興味深いことに梵文のこの箇所に対して、Candraprabhāvadānaのチベット訳は kukkuṭa-saṃpātika を khyim bya'i sgra dang ldan pa「鶏の鳴き声を有する」と訳している（Matsumura (1980), p. 249）。つまり原語 kukkuṭa-saṃpātika に対して、チベットの翻訳者は鶏飛ではなく鶏鳴の解釈を取った。これは上記の（II）の立場を裏づける証拠となる。[なお、このチベット訳の Candraprabhāvadāna と、正量部の MSK・文献Xが、中国文化圏の外にあって、しかも鶏鳴の解釈を示しているということは重要である。なぜなら漢訳における鶏鳴の解釈を考える場合、一つ考えねばならないことは、老子には「隣国相望み、鶏犬の声相聞ゆ」（第80章）という有名な句が理想世界の表現としてあることである。「隣の国はすぐ見えるところにあって、鶏や犬の鳴く声が聞こえるほどであっても、人民は老いて死ぬまで、（他国の人と）たがいに行き来することはないであろう」（小川環樹訳）。老子は中国の知識人にとって常識的な教養であるから、「鶏犬之声相聞」の言葉は訳場において語の解釈に影響を与え、鶏鳴という解釈を取らせた可能性もありうる。しかし中国文化圏の外で、鶏鳴という解釈があったことが上記の文献により確実となった以上、kukkuṭa-saṃpātika の訳を老子の影響として単純に説明できないことが確かめられた。]――上記の（II）の立場を裏づける証拠としては他にもある。漢訳の翻訳を調べてみると、同じ部派の伝承らしいのに、つまり原語が同じと考えられるのに、鶏飛と鶏鳴とに解釈に分かれる場合がある。その例を以下に二つ挙げる。(a) 中阿含教曇彌経（T1 618c29）や中阿含阿蘭那経（T1 682c10）や中阿含説本経（T1 509c11）は「村邑相近、如鶏一飛」で、鶏飛である。ところが中阿含説本経の同本異訳である古来世事経は、説本経と同じ箇所を「人聚落居鶏鳴相聞」（T1 830a15）とし、鶏鳴である。(b) 法蔵部系の起世経は「聚落城邑、比屋連村、鶏飛相到」（T1 319c25-26）と鶏飛、またその経の同本異訳である起世因本経も「村落城邑、王所治處、比屋連甍、鶏飛相及」（T1 375a17-18）と、鶏飛である。ところが同じ部派系で起世経・起世因本経の別本らしい大樓炭経は「天下有八萬郡國聚落居、鶏鳴展轉相聞」（T1 283a7-8）、「閻浮利有八萬郡國人民聚落居、鶏鳴者展轉相聞」（T1 308c29-30）と訳しており、鶏鳴である。――しかしこの（II）の立場の反証になるような例もある。玄奘訳大毘婆沙論では同じ翻訳の中に鶏飛と鶏鳴が同時に見いだせるのである。玄奘は巻133の箇所では「國邑村城鶏飛相及」（T27 690c6-7）と訳し、鶏飛であるのに、巻178の箇所では「村邑城廓鶏鳴相接」（T27 893c5）と訳し、鶏鳴である。玄奘は几帳面に正確に訳す人であるから、もしかすると鶏鳴と鶏飛では、それぞれ原文が少し違っていて、それを訳し分けた可能性がある。しかし私自身は、原文が少し違っていた場合、梵語で -saṃpātika の代わりにどういう語が想定できるか、今のところその答えを出すことができない。鶏鳴・鶏飛のどちらでも原語が -saṃpātika なら、その語に対してなぜ、鳴くという解釈がこれほどしつこく出るのか、語源的にそれをどう説明するのか、その問いにも答えることが出来ない。この問題を解決するようなインド語の資料が見い出されることを期待する次第である。

47）この詩節は恐らく、弥勒下生経典類に描かれる人寿八万歳の世の有様の一つとしての、「人が大小便をすると地面が割れて中に吸い込み、吸い込んだ後は元通りふさがる」という内容の文に対応しているのであろう。この事実は、広範囲で注意深い文献学的調査を要

求する。私が行った調査の詳細は次の論文を参照：岡野（2007）：「弥勒下生経類と『大いなる帰滅の物語』の関係」、印度学宗教学会『論集』34号。

48）この詩節も恐らく、弥勒下生経類に描かれる人寿八万歳の世の有様の一つとしての、「苦が無く、常に安楽である」という内容の文に対応しているのであろう。彌勒下生成佛経:「無有諸疾苦、離惱、常安樂」（T14 426b2）；彌勒大成佛経（No. 456）：「智慧威德五欲衆具、快樂安隱。亦無寒熱風火等病、無九惱苦」（T14 429b25-26）；彌勒下生成佛経（羅什訳 No. 454）：「智慧威德色力具足、安隱快樂」（T14 423c19）。

49）立世論は「是時諸人唯有七病。謂、大小便利・寒熱・欲心・飢・老」（T32 221a10-11）と7病（患い）を説き、MSK よりも「大小便利」の2病が増えている。パーリ転輪王師子吼経は、「三つの病、すなわち欲求（icchā）・不食（anasana）・老い」と3病を挙げる（DN III, p. 75）。有部の蔵訳世間施設は、転輪王師子吼経に相当する有部の経 *Dṛḍhanemi-sūtra (= *Dṛḍhanemi-vyākaraṇa, mu khyud brtan lung bstan pa) を経証として、性の欲望（'dod pa）・食物の不食（zas mi za ba）・老い（rga ba）の3病を挙げる（北京版 Khu 59b1-6、和訳：福田琢（2001）：前掲、50頁を参照）。有部の正法念處経も同様：「唯有三病。一者飢、二者渇、三者希望」（T17 399b19-0）。この3病が有部伝承の最古の形であろう。しかし有部の中阿含(130)教曇彌経は「曇彌。人壽八萬歳時有如是病、大便・小便・欲・不食・老」（T1 619a1-2）と5病をあげる。さらに同じ有部の中阿含(70)転輪王経と(66)説本経と(160)阿蘭那経では「寒熱・大小便・欲・不食・老」（T1 524b29, 509c13-14, 682c10）と、「寒熱」の2病が増加しており、3→5→7と増加した分だけ正量部伝承に近づいている。逆にいえば、正量部伝承は有部の最終的な伝承とつながりがあるわけで、このことは正量部伝承の新しさを意味する。なお法蔵部の長阿含転輪聖王修行経は最も病の項目を増大させており、9病を列挙する：「時、人當有九種病。一者寒、二者熱、三者飢、四者渇、五者大便、六者小便、七者欲、八者饕餮、九者老」（T1 41c23-25）。しかし同じ法蔵部系列の大樓炭経は「天下無病。亦不大熱。亦不大寒。復無飢渇人」（T1 309a1）と、非常に簡素な形である。阿含の転輪王経類に始まる、転輪王の統べる理想的世界の人の患い（病）を数え上げる表現は、阿含の説本経・古来世時経や、小乗から大乗への過渡期の信仰を示す弥勒下生経類（弥勒下生成仏経・弥勒大成仏経など）に受け継がれている。詳細は注47の岡野（2007）の論文を参照。中阿含(66)説本経の同本異訳・単行本である古来世時経は、「都有三病。老・病・大小便」（T1 830a16）と3病しか挙げない点で伝承の古さを思わせるが、しかしすでに大小便を入れている点で、有部系の5病の伝承が後の時代に崩れた形としての3病なのかもしれない。弥勒下生経類は、3病にまとめる表現が一般的で、例えば弥勒来時経は「人民無病痛者。盡天下人有三病。一者意欲有所得。二者飢渇。三者年老」（T14 434c1-2）とする。弥勒下生経類での表現に関する詳細は、寺岡正博（1986）：「弥勒下生思想の一断面　―『説本経』を中心として」、『印度哲学仏教学』1号、92頁を参照。

50）原文の daśaikādaśikāṃ tv āpya という表現の解釈は難しく、「10、11［…と続く住劫の、残りの期間］に至って」と訳したが、それは「第10劫、第11劫 etc.（乃至第20劫まで）の期間に至って」という意味に取ったのである。住劫は全部で20劫から成るが、今は第9劫

であるので、未来に残っているのは合計11劫であることになる。それらの11劫の間、寿命の減退期と増進期が代わる代わる来る、という主張がなされる。なお以前に発表した私の独訳では「［次の第］10［劫から始まる合計］11［の劫］に至って」と訳した。しかしここではより自然な解釈を試みた。

51）ここで犢子正量部と表現し、正量部と表現しないわけは、立世論という作品は有部の世間施設論と同じ頃に成立し、そもそも正量部という部派の成立よりも古い可能性が高いからである。私の考えでは犢子部で阿含からアビダルマへの過渡期の文献として形成され、後に正量部に引き継がれた作品であり、最終的には正量部に属して「劫末まで約七百年」の記事の付加などを受けたと思われるが、犢子部の立世論と正量部の立世論を明確に区別することは困難なので、あえて立世論の所属部派だけ、犢子正量部という表現にした次第である。

52）立世論は「小三災疾疫品」「小三災刀兵品」「小三災飢餓災品」の三品に分けて、それぞれが小三災の疾疫と刀兵と飢饉を扱う。Loka-p では、三品を一つの章にまとめて、「第11、小三災の章」（cullasaṃvaṭṭa-khaṇḍaṃ ekādasamaṃ）と名づける。

53）劫の定義がここでなされる。大毘婆沙論巻135によれば（T27 700c11-21）、劫という語には三つの意味があり、(1) 中間劫、(2) 成劫・壊劫などの劫、(3) 大劫、である。また中間劫（antarakalpa）には三種類があり、(1) 減劫つまり人寿が十歳まで減ってゆくもの、(2) 増劫つまり人寿が十歳から八万歳まで増大してゆくもの、(3) 増減劫つまり増劫の期間の後に減劫の期間が来るもの、がある。成住壊滅の４劫はそれぞれ20中間劫から成る。有部説では、住劫の20中間劫は、１減劫で始まり、途中に18増減劫があり、最後に１増劫が来る。中間劫は、成住壊滅劫の内（antara）にある時の単位であるから、中間劫と呼ばれるのであろう。しかし刀兵中間劫（śastrāntarakalpa）、疾疫中間劫（rogāntarakalpa）、飢餓中間劫（durbhikṣāntarakalpa）という場合の中間劫は、上記の中間劫と意味が異なるので、私の考えでは、それは減劫あるいは増減劫の劫の最後に来る大災害を意味し、恐らく劫と劫の間の切れ目、古い劫と新しい劫の中間にある破壊の期間であるから、中間劫というのではないだろうか。ただしパーリの註釈 Sumaṃgalavilāsinī（Thai ed., VI, p. 39 [in: BUDSIR IV]）を見ると、「刀剣中間劫とは、刀剣を［特徴として］具えた中間劫である」（satthantarakappo ti satthena antarakappo.）と簡単に説明する。中間劫という用語を歴史的に見れば、もともと非仏教徒の教団が用いていた言葉である可能性が高い。非仏教徒の長部の『沙門果経』の中で、マッカリ・ゴーサーラという外道（非仏教徒）が説く意見の中に、「62中間劫」や、「840万の大劫」という表現が使われている（PTS DN, I, 54）。そこでは中間劫、大劫という言葉が使い分けられているようである。Sumaṃgalavilāsinī によれば「62中間劫」とは「１劫には62中間劫がある」という意味で、「劫」の下位の単位として「中間劫」の語が使われている。原始仏教では非仏教徒たちのように宇宙論の空しい議論に耽ることが戒められていたが、アビダルマ文献形成の時代になってから、仏教徒は自らの宇宙論を説明するために「劫」の下位の単位として「中間劫」の語を使い出したのであろう。しかし四部経典にすでにその宇宙論の萠芽はあり、転輪王師子吼経に人寿の増減の規則的反復の思想が出てきた時に、実質的にその中間劫の考え方の基本は成立して

いたと思われる。仏教徒の中間劫の思想の形成は、最初期の仏教徒が有した「一仏一世界、一世界一仏」の考え方と切り離しては考えられない。田辺和子は阿含・ニカーヤの形成期に、漠然とした「一仏一世界、一世界一仏」の思想があったことを指摘したが、「一仏一世界、一世界一仏」の思想とは、仏が出現している時の世界は、仏が涅槃に入ると無くなってしまうという思想である。この「一仏一世界」の思想を反映して、「一転輪聖王一世界、一世界一転輪王」の考え方が成立したという（田辺和子（1997）:『パーリ聖典に見られる物語文学の世界』（山喜房仏書林）、138頁と382頁注49を参照）。ここに中間劫の思想の核心がある。中間劫では転輪聖王が仏の代わりを務めるので、仏がいなくても転輪王がいれば一世界は存在できる。仏は稀にしか世界に現れないが、転輪王の出現はそうではないので、「一転輪聖王一世界」の思想を加えることで、無仏の世界や時期をもうまく説明できる。仏が現われなくても、各世界は転輪王の時代をピークに周期的に生滅を繰り返してゆくことになる。こうして転輪王の思想を説いた阿含の転輪王経類において初めて中間劫の思想の土台となる考え方が明確化されたと思われる。アビダルマ文献以後は、中間劫とは、住劫の期間中に20回ある小さな宇宙周期であり、その20回のうちの18回は、転輪聖王の出現する人寿８万歳の時をピークとし、最悪の人寿10歳の時を破壊と再出発の時期として、上昇し下降する人寿のリズムの１周期を意味することになる。

54）Loka-p 小三災の章の冒頭にあるこれらＬ1～Ｌ3の文は、経証としての、阿含・ニカーヤ聖典に有る仏説の引用文であるが、漢訳立世論に有る文（215b6-23）の方が詳しく、Loka-p の文は簡略化されている。有部の蔵訳世間施設の第11章の冒頭も、劫の定義に関する聖典の文の引用（パーリ聖典 AN, II, p. 142,［No. 156］Kappa の経文に近似する）から始まっており、明らかに立世論と同じ叙述の形式をもつ。和訳として福田琢（2000）、前掲、50頁を参照。

55）現在の第９劫には700年が残されているのみという、正量部の特有の終末観を明確に表現したこの文は、立世論にもほぼ一致する対応文があるが（215b25-26）、Loka-p が「700年」とするのに対して、立世論は「六百九十年」とする。そして立世論の細註に「至梁末己卯年翻度此經為斷」つまり「梁末の己卯（つちのと・う）の年に至りて此經を翻度するを斷りと為す」と記し、690年が翻訳された年（A.D. 559）から起算されるべきことを注記している。

56）Loka-p や立世論では、住劫の第１劫における帰滅が説かれているが、MSK や文献Ｘの宇宙論的歴史では、住劫の初劫から第８劫までは、劫末のカタストロフがない。この点について、犢子正量部内部での見解の相違を指摘することが出来る。

57）「非法の淫欲に染著し、不正な強欲に支配され、偽りの教え（邪法）にとらわれる」の Loka-p の原文は adhammikā atirāga-rattā visama-lobhābhibhūtā micchādhamma-paretā（Denis, I, p. 178）である（なお adhammikā atirāga を adhammikātirāgaと複合語の形に訂正して「非法の淫欲」と解釈した）。この文と似た文が、小三災を説明する倶舎論世間品第99頌cd釈の中にも見つかる：adharma-rāga-raktā bhavanti viṣama-lobhābhibhūtā mithyādharma-parītāḥ（Śāstrī, I, p. 556). また倶舎論より古い有部の『世間施設』の中にも（チベット訳で）ほぼ同じ文がある：北京版 No. 5588, Khu 58b3（訳

は福田琢 (2001)、前掲、p. 49 を参照)。これらの文は聖典に遡り、パーリ聖典では長部の転輪王師子吼経の次の文にあたると思われる：Pañcavassasatāyukesu bhikkhave, manussesu tayo dhammā vepullam agamaṃsu, adhammarāgo visamalobho micchādhammo.（比丘たちよ、人間たちが五百歳の寿命を有する時、三つの法が拡大した：非法の淫欲と、不正な強欲と、偽りの教え）。また中阿含転輪王経：「人壽五千歳時三法轉増。非法欲・貪・邪法」(T1 522c26)。また長阿含転輪聖王修行経：「五百歳時衆生復有三惡行起。一者非法婬。二者非法貪。三者邪見」(T1 41a8-9)。つまり犢子正量部の立世論・Loka-p や、有部の論書における引用は、それぞれの部派の転輪王師子吼経相当の経に基づいているのであろう。

58）この文の Loka-p 原文は ametteyyā apetteyyā asāmaññā abrahmaññā na kulejeṭṭhāpacārino であり、この文も阿含ニカーヤ聖典に遡り、パーリ聖典では次の長部転輪王師子吼経の文と合致する：Aḍḍhateyyavassasatāyukesu bhikkhave, manussesu ime dhammā vepullam agamaṃsu, amatteyyatā apetteyyatā asāmaññatā abrahmaññatā na kulejeṭṭhāpacāyitā.（比丘たちよ、人間たちが250歳の寿命を有する時、これらの法が拡大した：母と父を敬わず、沙門とバラモンを敬わず、一族の長老を敬わないこと）。

59）原語の bījagāma-bhūtagāma は逐語訳すれば『種子村・鬼神村』となるが、『種子村』は種子（あるいは種子植物）一般を、『鬼神村』は草木、特に蔓草や樹々などを意味し、『種子村・鬼神村』とペアで表現されて、植物の総体を表現するようである。また『森の王』は花がなくても果実を結ぶ樹々を意味するようである。岡野 (2005)：「『大いなる帰滅の物語』(Mahāsaṃvartanīkathā) 第５章２節～４節と並行資料の翻訳研究」、『哲学年報』64輯、30頁、注33と34を参照。また「枯れる」と訳した原語の動詞 duppajjanti は伝承の悪い語形のようで、意味不明であるが、立世論の対応文に「以是因縁故天雨不等。一切種子樹藤藥草並皆枯焦不復結實」(215c25-26) とあるので、この動詞は本来は「枯焦する」という意味になるはずである。

60）原語 appaṭivattakāni は意味不明である。E. Denis は “ne s’épanouissent pas”「花開かない」と訳すが、Skt. *aprativartaka と解釈したのか。しかし appa- で始まる複合語であると見なすべきで、appa の後にくる語 [a]ṭivattaka が正確な伝承の語形を失っていると思われる。Skt. alpa+ativṛttaka「とても丸々としたものが少ない」あるいは alpa+vaṭaka「塊根が少ない」などの解釈の可能性が考えられるが、満足できるものではない。立世論の対応文 (215c27) はこの語を訳していないようである。

61）人間ならざる者たち（非人）とは、倶舎論世間品第99頌cdの称友疏によれば、「ピシャーチャ鬼など」である (amanuṣyāḥ piṣācādayaḥ, Śāstrī ed, I, p. 556)。これは MSK 4.3.9 からも確かめられる。

62）『健康は最高の利得である』の言葉は Dhammapada, 204a にある。

63）dhātuso の語の解釈について、真諦は立世論で「自然にして而も生ず」と訳しているので、それに従った。

64）Loka-p では地獄・畜生・餓鬼の三道をあげるが、その同一の文で、立世論では「地獄・

畜生・餓鬼・阿修羅道」と四道をあげる。犢子正量部は六道説を取るので、立世論の説くところが伝承の本来の形であり、Loka-p では、パーリ上座部に属する編集者により阿修羅道が故意に削られたと推測される。

65）この場合の非人とは、MSK 4.3.22 によれば、yakṣa たちである。

66）後ろの文（Denis, I, p. 189. ll. 3-4）から、「彼らの毛穴から生命力を注ぐ」を補った。

67）「同居する」（saṃvāsaṃ kappenti）の箇所を立世論は「因相愛念、男女共居」（218b18、220b14）と訳している。真諦三蔵は男女関係の表現としてこの文を理解した。

68）この文を寿命10年から寿命 2 万年にわずか 1 世代で寿量が急激に伸長すると理解すると、その点で立世論と Loka-p は転輪王経類の阿含の記事とは異なり、特異な伝承であるといえるが、MSK 4.4.4 でも、この立世論の立場（正量部の見解）を確認できる。

69）kusalehi dhammehi を kusalehi kammehi の誤記とみなし、修正して読む。

70）1 中間劫は、最悪の七日間が過ぎて終わるのであるが、この文（L 35）が、人寿の回復（第一期の寿命増進）の後に置かれ、まぎらわしい位置にあるために、まるで中間劫が終わって最初の寿命増進の頂に達した時に突然終わるかのような誤解を生じさせる。

71）『成立の頂』（P. vivaṭṭa[na]-sīsa）という表現の「頂」とは、何かが増大してゆく運動において、或る時期に達した頂点、上の限界を意味する。似た用法として『破壊の頂』（saṃvartanī-śīrṣa）という表現があり、大三災の運動の説明のために倶舎論（世間品第100頌cd；冠導巻12-18a）等に説かれる。

72）立世論はここで「如是説名第二劫中間。第二壽量四十千歳」（217a1-2）と訳しており、正しい。

73）ここで立世論は、寿量 4 万年と 8 万年の間に、 6 万年の段階を置く。

74）立世論は 8 万歳の前に 6 万歳の段階を置くため、Loka-p にはない「如是説名第三劫中間。第三壽量六十千歳」（217a16-17）という文が立世論には見られるが、その文の「第三劫」の表現は明らかに間違いで、「第二劫」に修正すべきである。なおこの箇所に対して、国訳一切経の渡辺楳雄の注で述べている訂正意見は正しくないと思われる（彼の注32、33、34、35、36はすべて間違い）。

75）このL 32～34は仏教徒が使い回しする常用文といってよく、その内容に関しては岡野(2007)：「弥勒下生経類と『大いなる帰滅の物語』の関係」、印度学宗教学会『論集』34号を参照。

76）この文で Loka-p は「最初の中間劫」とするが、立世では「第二劫」とする。ここでは Loka-p よりも立世論の記述の方が正しいと思われる。Loka-p のように（L 51、L 95）小三災のいずれに対しても第 1 劫と記すのは理論的におかしい。立世論では疾疫劫を第 1 劫にあて、刀兵劫を第 2 劫、飢餓劫を第 3 劫にする。

77）Loka-pの編集者はここで立世論の原本を簡略化する際に、作業的な誤りを犯したようである。家々の消滅までをここで語ってしまうのは、先を急ぎすぎている。家々の消滅は後で語られるので、ここでは「国・村・市場町が次第に消滅する」というだけでよかった。この段落に対応する立世論の文は、「是時大國王種悉皆崩亡。所有國土次第空廢。唯小郡縣是其所餘、蓋不足言。相去遼遠各在一處」（217c19-21）である。

78）ここで七日後に、つまり刀兵劫のカタストロフにより、中間劫が終わることが明言されていることに注意。この文から、有部の住劫20中間劫の理論と同じように、犢子正量部においても、各中間劫は最悪のカタストロフにより終結すると理解されていたことが確認される。

79）「［新しい］劫が出現する」という文に対応する文は立世論にない。

80）立世論の対応文では「是の如く初劫中間は大刀兵に由りて究竟窮盡し、次に第三劫の來たり續く」（218c4-5）とあるが、初劫から第三劫に移行するはずがないから、明らかにこの文は誤りである。大正蔵と中華大蔵経を見るとこの文に特に異読はないが、Loka-p に従い、「初劫」を「第二劫」と訂正すべきである。なお国訳一切経（論書部１）で、渡辺楳雄はこの文に注記して「第三劫」を「第二劫」の誤りとするが（注の49）、この注記には同意できない。初劫は疾疫劫、第二劫は刀兵劫、第三劫は飢餓劫で終わるのであり、この文では、その第二劫が刀兵劫により以上のような有様で終わったので、この後に続くのは第三劫である、と説いているわけである。

81）ここで立世論は「如是説名第三劫中間。第二壽量四十千歳」（218c21-22）という文で、「第三劫」としているのは正しい。

82）この文に相当する立世論の文（218c22-25）では、「彼らの寿量は８万年である」と一足飛びに行かず、８万年の代わりに、６万年になっている：「寿命六十千歳」。

83）ここで Loka-p は「最初の中間劫」と表現しているが、立世論では「第三劫」と表現する（219b6-7）。これは立世論の記述の方が正しいと思われる。第三劫の終わりに飢餓劫が来る。

84）Denis は写本 satalavutti の読みを sakalavutti と修正して読んで「完全な無雨」と解釈するが、むしろ salākāvutti（くじ引き棒による生活）と修正すべきである。salākāvutti, Skt. śalākāvṛtti については、BHSD (s.v. śalākāvṛtti)、倶舎論世間品第99頌ab釈（Śāstrī, I, pp. 556-557；冠導巻12-15a；山口&舟橋訳（1955)、495-496頁）ならびに蔵訳世間施設（北京版 Khu 60b8-61a2；福田琢（2001)、前掲、52-53頁）を参照。倶舎論世間品は飢饉について cañca (or cañcu), śvetāsthi, śalākāvṛtti という三つの呼び名を説明している。有部の蔵訳世間施設における飢饉の説明は、倶舎論と同じではなく、飢饉について六つの異なる呼び名を挙げているが、その中に śalākāvṛtti が入っている。

85）立世論の対応する文から判断して、anyatra + ablative が否定をともなった構文（「～以外には・・がない」）と判断して訳した。

86）この記述によれば、刀兵劫も疾病劫も飢饉劫もそれぞれ７日で終息することになる。立世論と Loka-p の記述は単純素朴で、後の有部説のように、刀兵劫は７日、疾病劫は７月７日、飢饉劫は７年７月７日という複雑な説を特に説いていないことに注意。この点で、MSK 4.3.19 に見られる説（有部説に近いと思われる）と、Loka-p は異なる。

87）この文は立世に対応がない。

88）この Loka-p の文が「第３中間劫」とあるのに対して、それに対応する立世論の文には「劫初中間」（220c1）とある。これは立世論の訳の間違いではないかと思われる。「劫初中間」は「第三劫中間」と訂正されるべきであろう。立世論のそれに続く文に「次に餘劫の來り

て續く」（220c2）とあるが、この「餘劫」とは第四劫を意味するはずである。

89）立世論には「如是説名第三劫中間。第二壽命四十千歳」（220c18-19）とあるが、「第三劫」は間違いで、「第四劫」と訂正すべきである。また同様に、そのしばらく後にある文「如是説名第三劫中間。第三壽量六十千歳」（221a3-4）の「第三劫」も間違いで、「第四劫」と訂正すべきである。立世論の訳にはこのような混乱がある。

※本研究は科研費（19520052）の助成を受けたものである。